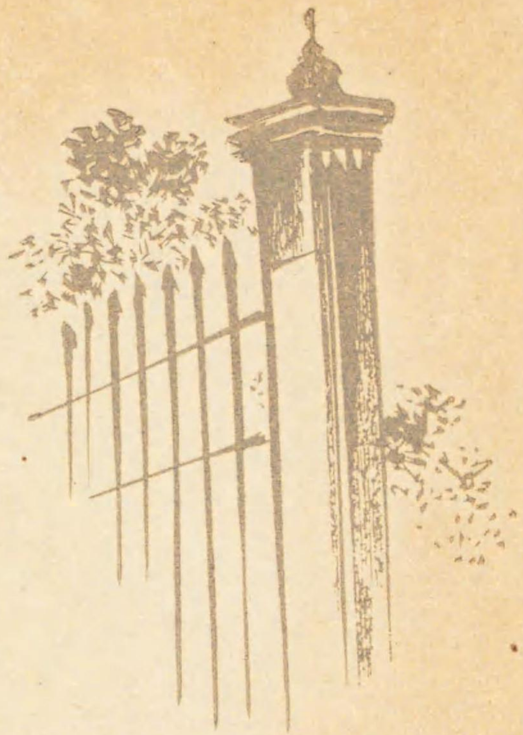
学文年 動物園

141
393



嘉本

汪青著

青年民義版

友人森本江南著一書題而言動物園稿成來而命予一言之批評乃繙覽之則實如其書名名不背於其實動物之義談而或以理論或以事實以偶言而能諷世譏俗以使人有所規有所樂矣忽犬忽猿狐話現出則牛話來和獸未隱踵而洋獸來說來說進而不失其要詼諧以足於笑詞以足於規如有骨如無骨使讀者不思自失如醉如醒不知不識使有漫遊於動物園之感嗚呼是本書之特色乎江南子能與世之童蒙以此賜可謂盡矣予更亦何乎云焉予

明治文庫

素賛其文之流暢而易讀易解非俗非雅賛繁簡不失其宜敢以冠詞代是批評云爾

思ひずゑぢ〳〵

象見て如何ゐ

和唐内も

明治廿六年六月

夢廼舎主人識

特47
609

動物園

江南散史著

猿

猿は形最も人に似たる獣なることは諸子の能く知る處ならん又其性質の敏捷にして狡猾なることも諸子の知らるゝ處ならん又之に教ふるときは種々の舞戯を演ずることも諸子の知る處ならん實に猿猴類は最も面白く活潑なる獣なり然れども諸子等は神社佛寺の境内或は見世物小屋にありて索に繋がれ或は籠の中にある一二のものを見たるのみ未だ此獣の深き山に住み自由に樹々の梢に攀ぢ上り果實を取りて食ふことは見たることなからん故に余は今猿猴類につき其種類なり性質なり習慣なりの大略を記して諸子等に示さん

猿は元來暖き地に産するものにして寒國には住まぬものなり偶々寒國に移し來るも冬は其寒さに堪へず死するに至ることあり故に世界

に於ては亞細亞亞非利加及亞米利加の暖地に生じ歐羅巴洲には南方地中海と稱する入海の岸邊に當る「じぶらるたる」と云ふ土地を除く外には此類を見ることなし

何れも山林に住みて果實及蟲類を食ひ樹を攀ることは甚だ巧なり夜は樹木の間に粗末なる巣を造り此に臥す

其種類は三十乃至四十種もあれども著しきものを擧ぐるときは猿猩々狒〻狐猿尾長猿手長猿等なり

凡て猿猴類は其兒子を慈しむこと甚だ深く氣候の少しく寒き時などは牡と牝との体の間に巳れの子を擁して暖む其兒子を携ふるもの獵夫に出で逢ふときは手を合せて助けを求むる狀は誠に憐なれば獵夫も爲に之を放射し殺すに忍びずと云ふ

●子猿の親猿を慕ひたる話

昔し信濃の國入間郡の獵夫或日山に入りて一匹の猿を擊ちて家に携へ帰り翌日皮を剝かんとて爐の上に吊し置けるに其夜人の寢ね靜りたる頃何かこそ〳〵と物音のするにぞ獵夫は眠りを覺し何事ならんと障子の破れより窺に見るに何れより入り來りたるにや三匹の子猿は更る〳〵下なる爐にて手を暖め一匹は他の子猿の肩に上り吊り下げたる親猿の疵口を暖め居たり

常には熊狼の猛獸を殺すを物の數ともせざるさしもの獵夫も此有樣を見て思はず涙を流し親の子を慈み子の親を慕ふ情は畜類と雖も異なることなきかと大に感し悟りて終に其職業を止めたりと云ふ

●猿の人眞似

亞米利加の水夫或時海岸より遙か隔りたる内地の土人に商はん爲めに多くの毛帽子を脊負て行けり其途中に一の森を通りしに多くの猿

は樹々の間に群り遊び枝を渡り梢に攀づるもの幾百とも知らず時はしかも夏の最中にて日光は頭の上に直射し非常に暑かりしかば水夫は木蔭の涼しき處を擇びて脊負し荷物を下ろして一つの毛帽を取り出し之を頭に被ぶりて其儘其處に臥し居たり

零時ありて水夫は眠りを醒ませしにてはそも如何に側に置きたりし荷物の見へさりければ盗賊に奪はれたるならんかと大に驚きしが不斗樹の上に「きや〳〵」と喧ましき聲の聞ゆるに氣附之を見上ぐるに多くの猿は皆毛帽を以て黒き頭に戴きながらさも面白げに戯むれ居れり

水夫は大に怒り戻せ返せと叫び罵れども猿等は樹の上にありて此れ取れと言はぬ計りに牙を露し頭を突き出すもあれば臀を叩きて嘲けるが如きものあり

水夫は毛帽を取り戻すの術もなければ益々怒りて「此畜生よ之れも取れ」と云ひながら頭に被りし毛帽を地に擲ちしかば多くの猿等は皆頭に被りし毛帽を脱ぎて一時に地上に投げ棄てたり

水夫は怒りの余りになしたる事が圖らずも帽子を取り戻す手段となりたるを喜び悉く毛帽を集めて再び脊負勇み立ちて内地に向ひて歩み行きたりと

●猿の惡戯

亞非利加の「せねがる」より英吉利の「ろんどん」に向ふて航する某船中に「じやつく」名づくる猿ありし初めの程は甲板の一隅に繋がれけるが漸馴れ親しむに從ひ放ちて自由に船中を遊び戯るゝことを免されたり

此猿は頗る面白き奴なりしかば船客及水夫等の退屈なるときは至極

好き玩弄物となれり

「じやつく」は時には窃に水夫の後に來り帽を奪ひて檣の上に攀ぢ上ることあり又時には料理場に來り庖丁肉叉火箸其他手ごろの小道具を盗みて逃げ去ることあり料理人の追馳るときは周章て其手を切り血を見て驚き叫び或は燒けたる火箸のために指を火傷することあり然するときは両三日は稍靜かなれども負傷の癒ゆるときは尚懲りもやらず悪戯をなすこと以前と異なることなし

此船中には多くの豚を積みたれば一週間に両三度其健康を保たしめんがため箱より出だして甲板の上を散歩せしむるを常とせり

此時「じやつく」窃に物陰に身を隠し不意に躍り出でゝ豚の背に馬乘りするにぞ豚は驚きて甲板の上を奔り回るを「じやつく」は騎兵を氣取り揚々として馳驅するを此上なき樂とせり

時には豚の背より轉び落つることあれば水夫等は之を見て大に笑ふを「じやつく」は何を笑ふにやと言はぬ計りの面持にて済したる顔付をすることそ一層可笑けり

船中に又「じやつく」の外に三匹の小猿あり「じやつく」は此小猿を已れの背に乘せ甲板上を奔り回り夜は互に胞き合ふて寢ね最も睦しく暮せしが船客等の兎角小猿を愛するを見て「じやつく」は漸く嫉ましく思ひしにや遂には憐れにも二匹の小猿を海中に投げ込めり

殘れる小猿は我が友を失ひ只肅然としてありしが或日「じやつく」は水夫が甲板の上に忘れ置きたる刷毛と白ぺんきとを見出し小猿を捕へて頭より足の尖きまで塗り立てゝ恰もぺんき造りの猿の如くなしたるを水夫等は見て大に笑ひしかば「じやつく」は見附けられたりこは仕損じたりと云ふやうなる樣子にて遽てゝ小猿を海中に投げ込み高き

檣の上に攀ぢ登りたる儘水夫の怒りを恐れて降りも得せず二三日も此檣の横木に留り居たりしが追々空腹に迫り最早堪へ難くなりたるにや終に飛び降りて船客の許に走り行き掌を合せ袖を率き助けを請ふの有様は如何にも憐れに見えければ客は水夫に此様子を話し其罪を赦し遣りしとぞ

●狒々

狒々は亞非利加の熱帶國に住する猿類の中最も大なるものにして身の長五尺に余り全身に橄欖色の毛を生し眼は藍色にして頤に黄色の鬚を生ず其容貌頗る醜く性資も亦最も猛しくして力厭くまで強し象の如き大獸も猶之を避くると云ふ

常に深き森の中に木の枝を以て粗き小屋を造り雌雄其中に住みて兒子を愛養するものあり然れども饑ゆるときは村里に來り土人の家に

忍び入り食物などを奪ひ去ることあり

獵夫もし山中にて狒々を見るときは一發にて撃ち殺さゞれば電光の如く飛び來り銃を奪ひて打ち倒し銃心を嚙み碎くに至る其齒の強きこと以て知るべし

●塙團右衛門大猿を退治す

猿の大なるものは印度諸島又は亞非利加等の熱帶地方に多けれども我國にも亦往々之なしとせず

天正の頃安藝の廣島に福島伊豫と云へる人あり此人の屋敷の奥座敷の側に一つの厠あり夜な〳〵此厠の中に人の聲にもあらず又鳥の聲にもあらざる怪しき聲のしければ人々之を怪物雪隱と稱へ誰も怖れて之に入るものなかりき

或る夜事ありて全藩の士阪井大橋木村なんどの諸人來りて此屋敷に

集りたり此時園右衛門も亦來り會し四方山の事ども談ぜしに追々時刻も移り早子の刻ともなりし頃園右衛門は立ちて厠に往きたれば主人伊豫は異變あるを氣使ひ側の小性に命じて燭を執りて園右衛門に從はしめたり

厠は大なる松の古木の下にありて最と古び蔦蘿は松の軒より厠の屋根に纏ひつき如何にも物凄き怪物の出でそふなる處なり

園右衛門は何氣なく厠にありしに醒き風の飄と吹き來ると思ひしに忽ち蘿を

傳ひて下り來り簌々と音して厠の屋根に落つるものあり園右衛門謂ふやうさては常々風説の高き怪物ならん已れ生捕にして懲し呉れんと息をこらして竢ち搆へしに何か怪しき物ありて厠の軒端より中を闖ふ其面宛ながら赤鬼の如く眼の光りは烱々として此方を見結るにぞ園右衛門は眼を怒らして之を叱りつけしかば怪物は身を轉じて下に降り直に厠の下に回り毛だらけの手をもて園右衛門の臀のあたりを撫でたれども園右衛門は尚も動かず暫く待ち居たり

怪物は再び手を伸べて睾丸を握らんとするを園右衛門は透さず其手を執へんとしければ怪物は又もや躍りて屋根に上り厠の中を闖ふこと前の如し園右衛門は突立上りて直に其腕を攫み力を極めて引き搦り下ろしたれば厠の戸は碎けて燈火は消へにけり

怪物は暗中にありて轉輾身をもだへ逃れんとすれども强力無雙の園

右衞門なれば何かは以て逃すべき此時向きの小性は走り來て怪物の足に取り付き之を地上に引き倒したれば團右衞門は急に腰刀を抽き束をも通れと怪物を刺したり

此物音に屋内の主客は燭を照して驅け來りしに團右衞門は滿身血に染り其傍に厖々としたる毛だらけの怪物の地に僵るゝあり衆近寄りて之を視るに身の長五尺にも余れる極めて古き大猿なりしと云ふ

●蝙蝠

蝙蝠は動物の中にて甚だ奇異なるものにして其種類も亦極めて夥し其性質は鳥類に似たる處もあれど鳥類にもあらず又四足獸類に似て四足獸類にもあらず諸子等は夏秋の日暮に空中を飛び回る蝙蝠を戯れに打ち落したることあらん此時細かに其形狀を見るべし諸子等の翼と稱するものは大に鳥類の翼と異なりて恰も薄きごむの

如きものなり故に之を肉翅とは云ふなり

又此獸の骨骼を子細に知らんと思はゞ數日の間蝙蝠を土中に置くべし然るときは肉は悉く爛れ落ちて只骨ばかりを殘すべし其前肢は拇指を除く外の四指は身体の長けよりも長し後趾の指尖きには各々鈎の如き爪を有し以て墻壁或は樹木の枝などに懸かるの用をなす

此獸は觸覺の頗る鋭きものなれば眼を縫ひて放つも物に突き當ることなく狹き通路も自在に飛び回るものなり

元來此獸も暖國に適するものなれば北方の諸國に住むものは小にして南方の國々に住むものは大なり我國にても琉球或は小笠原島等の暖國に産するものは非常に大にして翼を張るときは二尺乃至三尺に至るものあり

繼じて蝙蝠の類は冬季と晝間は墻壁或は岩穴などの間に眠り夏秋の

頃に至れば日暮より出でゝ群り飛び小虫及果實の類を食とす其種類の重なるものは「あかかうもり」「きくがしら」「やまかうもり」吸血蝙蝠狐蝙蝠等なり

●蝙蝠人を殺す

印度の「まらばる」と云へる土地の海濱に夥しく產する狐蝙蝠は翼の長さ四尺に余り色赤く頭の形は狐に似たり日暮に至れば群り飛ぶこと幾千とも知れず空中も之が爲めに暗黑となることあり其聲も亦大にして二里を隔つる地にあるも之を聞くことを得ると云ふ常には果實を食とすれども又家に畜ふ處の雞或は猫の類を殺害し時としては人を襲ひて重き傷を蒙らしむることあれば土人は之を大に恐るゝと云ふ

又南亞米利加の吸血蝙蝠は好みて獸類及人間の血を吸飲す其血を吸

ふの方は人畜の戸外に臥すを見るときは窃かに飛び來りて其傍に匐ひ行き靜かに吸ふことは恰も蚊の來りて能く寢入りたるものゝ血を吸ふごとくなれば吸はるゝものも左のみ痛みを覺ゑず目醒むる頃は早体内の血は吸ひ盡され爲めに死するに至るもの少なからずと云ふ

●蝙蝠鳥類の仲間を除かる

蝙蝠は固と鳥類の仲間なりしか或時鳥と獸の間に不和を生じ遂には一大戰爭を開くべきことゝなれり獸類には獅を大將と仰ぎ虎豹犀象の猛將より鼠の如き弱卒に至るまで吾れこそ功名手柄して獸類の面目を顯はさんと齒牙を磨きて待ち構へたり

鳥類も鷲を大將と推し立てゝ鷹鳶烏百舌雀に至るまでやをら獸類に負けを取りて鳥類の名を落さんや今こそ手並を見す時なるぞと嘴を尖らし爪をたてゝ開戰の時や遲しと待ち居たり

然るに獨り蝙蝠は何れの味方もなさず手を袖にして傍に扣へ知らざるものゝ如くなし居りければ鷲將軍は使を遣り早く從軍の用意をなすこそ善けれと命ぜしに蝙蝠類は何の返答をなさゞりけり

頓て両軍の大合戰となりしかば互に死力を盡して打戰ひ鳥類共に討死するもの日々に幾万と知らずされど漸獸類の旗色よきを見て蝙蝠は一軍を率ひて横合より俄かに鳥軍の中に攻め入りたれば不意を擊たれて鳥軍は右往左往に立ち乱れ大敗北を取り遂に和睦を乞ふに至れり

偖軍止むの後鳥類如何でか此不忠不義なる蝙蝠に交るものあらん皆擯けて容れざりければ蝙蝠は更に獸王の許に至り其幕下とならんことを願ひたれども獸類亦其不義を惡みて之を斷りければ蝙蝠は今更後悔の涙を流し肅然として壁の間や岩の間に身を隱し晝は仲間の惡みを恐れて出でゞ日暮るゝ頃より蚊虫の族を食ひ稍く露命を維ぐ憐れ墓なき境界に至りたりと云ふ信義の大切なることは禽獸の間と雖も異なることなきか

犬

犬の種類の多きことは諸子の知れる處ならん其大なるものは四尺乃至五尺より小なるものは僅に一尺に過ぎず耳の長きものあり短きものあり毛の卷き縮れるものあれば否らざるものあり其色も亦一樣ならず然れども概して其性質は怜悧活潑にして已れを愛する人には能く從ひ其報に恩ゆるものなり且其聽くことゝ嗅ぐことは頗る敏くして走ることも速かなるものなれば獵に使役するには最も適當す又怪しきものを見るときは吠ゆるの性あれば夜中家を守らしむるにも亦適當なるものなり

凡て犬の類は世界の何れの地にても人に隨從し處として犬の住まざる地なし是其飼ひ養ふことは他の獸より容易くして其愛情あることゝ誠實なることゝは他獸の及ばざる處なれば大に人に愛し養はるゝ所以なり

諸子等は犬の人間に對して役立つことは只夜を守り山野の獵に使役するのみなりと思ふならんが犬の世に功あることは啻に之のみならず北方「ゑすきもらど」と稱する寒國に至れば橇を引かしむるに犬は欠くべからざるものなり又足に蹼ある水犬ありて水に入り鴨鵜などの水鳥を獵するに使ふものあり

歐羅巴及亞米利加等にては野獸の羊を害せざるためには多く犬をして守らしむ實に犬の世の中に効あることは誠に大なるものなり人にして徒に食ひ無益に眠るものは遙に犬に劣るものと云ふも可なり

●犬主のために死す

晉て佛蘭西國に一人の商人あり居處より二三里も隔りたる或る田舍の取引先きに賣掛の代金を受取らん爲めに馬に乘り久しく愛養せし處の一匹の犬を伴ひ行きたりやがて先方にて受取りたる金貨を革裏に納め吾が家に歸りけるが時しも夏の最中にて日の光りは燒くか如くなりければとある路の傍の岩角より清水の涓々流れ出で冷しき木蔭だに立ち添ひければ商人は良き休み處なりと馬を傍への松に繫ぎて岩に腰打ち掛け清水を汲みて渴を止めしが余りの快さに歸るを忘れて思はず時刻を過しけるが日は早西山に傾くに驚き急ぎ馬に打ち乘りけり

是時犬は馬の前に進み出で常ならず吠へけるを商人は何を吠ゆるにやと叱りながら馬を進めけるに犬は益々猛りて吠へ止まず遂には馬

の前足に嚙み付きて強て主人を止めんとせり商人は扨は此犬狂病を發せしならんと腰なる「ぴすとる」抜き出し一發の下に愛犬を倒し見向もやらで馬に鞭ち走りけり行くこと數町にして忽ち革嚢を木蔭に遺したることを思ひ出で大に驚き前きに犬の吠へしは之なり之なりと急ぎ馬の頭を回らして飛ぶが如く元の木蔭に馳せ歸りけるに憐れや犬は滿身血に染り息絶々の間にも主人の革嚢を守護しけるが今や主人の來るを見て微かに尾を振りて此方に來らんとするも最早其氣力もなくして倒れたり商人は落るが如く馬より下り犬の前足を握り「我れ誤れり我れ誤れり定めて不仁の主人なりと思ふならん免せよ免せよ」といたわりけるが犬は主人の手を舐りながら一聲の歡喜の鳴きを最後とし忽ち目は塞ぎぬ商人は哀みに堪へず仮に愛犬を其地に葬り後に此に碑を建てゝ永く犬の忠實を顯したりと

●犬人を救ふ

「せんとばーなーど」犬は最も大なる犬にして全身に長き毛を被ひ力亦頗る強し抑も此犬の名に因て起りし所以を尋ぬるに歐羅巴洲の西班牙と以太利と稱する二國の間は彼の音に名高き「あるぷす」と名づくる險しき大山脈にて界せらるれば両國の往來は此險岨なる山中を越ゆるより外に路なし然るに此山路は冬日嚴寒の時節は固より夏と雖も間々烈しき吹雪來りて見る〳〵間に路を埋め旅人の積れる雪の下に葬らるゝもの其數を知らず

此山中の最も險しき「せんと、はーなーど」と稱する地に一の僧寺あり此寺の僧ども相謀り多くの犬を飼ひ之を使用して雪に艱みて命を落さんとする旅人を救はしめたり

さて此犬の旅人を救ふには通例二匹づゝ相伴ひ一匹は食物の入れた

る籠と葡萄酒の瓶とを頸に懸け他の一匹は毛布を脊に負ひ山中雪深き地を徘徊し旅人の饑ゑ凍へて歩み難きもの此犬に出で逢ふときは先づ毛布を取りて身に纏ひ葡萄酒を飲みて体を暖め漸く生氣に還れば二匹の犬に助け伴はれ「せんと、ばーなーど」の寺に至るを常とす此間犬は旅人を伴ひ歸れることを寺僧に知らさんがために絶えず高聲にて吠ゆ若し甚だしく凍餓して歩む能はざるときは一犬は傍に寄り添ふて已れの体を以て旅人の体を暖め一犬は走り歸りて寺僧を其處に導き來るを常とす

又旅人の雪中に埋められて死せるものを嗅ぎ出すときは足を以て雪を掻き去り死尸を露したる後歸て寺僧を伴ひ其處に來ると云ふ

此等の犬の中曾て「ばいりー」と名づくる勇氣にして旅人を救ふに頗る巧なる犬ありしが生涯の中に四十二人の旅人を救ひければ金牌に其

犬の功を刻し之を頸に下げしめしとぞ

●畑時能の犬

犬とし云へば西洋の犬のみ怜悧にして我國の犬は愚なるやう思へども我國の犬にも昔より主に忠なるものもあり事に敏きものもありて史上に其例を見ること少なからず

新田義貞の臣に畑時能と云ふ人あり此人幼にして角力を喜み力厭くまで強く武勇人に秀でける

義貞の死するや時能は殘兵僅かに二十七人にて越前の鷹巣の城に立籠りたり此城は中々要害堅固の城なりければ賊軍は之を落すこと能はざりしかは更に足利高經高師治なんぞの賊將は多くの兵を合せて此城を取り圍み麓に二十七の陣屋を布きて互に進み更々攻め立てけり

時能の姪に僧あり快舜と云ふ又僕に惡八郎なるものあり二人共に強勇比なし又時能は久しく愛養せし一犬ありて名を犬獅子と呼ぶ

三人夜出でゝ敵陣を襲ふに先づ犬獅子遣りて敵の様子を窺はしむるに敵陣の備嚴重なるときは犬獅子は高く吠へて之を知らしむ若し敵兵どもの眠りて備を怠るを見るときは犬獅子は尾を搖して歡び飯るを常とす之によりて三人は敵の動靜を悉に知り共に敵陣に驅け入りて當るを幸に靡ぎ立つるにぞ敵兵は不意を打たれて狼狽し味方の驟ぐを敵と心得同志打して殺さるゝもの數知らず寄手の陣々屢々此手に惱されければ遂には時能に賂して其鋒を避くるの計をなすものあり時能の勇名大に震ひ敵中呼びて畑將軍と云ふに至れり是れ固より時能の武勇によれども犬獅子の功も亦多しと云ふべし

●烏取部萬の犬

烏取部萬は物部守屋の臣なり守屋の戰敗れて死討せしときは萬は遇々外にありしが變を聞きて急き走せ歸る途中敵に圍まれければ萬は路の傍なる茂りたる藪の内に驅け入りて敵を欺く一策に繩もて竹と竹とを連ね合せ其一端を率きければ此處彼處の竹は皆動搖し藪の中には宛から多くの伏兵あるが如し之を以て敵は躊躇て敢て近寄らんともするものなし此間に萬は潛かに脫れ出で木の枝に攀ぢて向ひの岸に跳り上り何れにか脫れんと見回らす中に岸の邊り

に一人の敵の隠れ居て切て放ちし矢のために萬は終に射殺されて死にければ其首を獄門に架けて暴したり

然るに萬の家に年比飼ひ養はれし犬ありしが雨風烈しき夜萬の首を啣み去り或る墓地に至り土を撥きて主人の首を埋め已れも其處に舌嚙み切りて死にゝけり

時の帝は畜類にして能く主の恩を知り義のために自ら其身を殺せしを御感ありて萬の墓と此犬の墓とを雙べ建て命じて義狗の墓と記さしめ賜ひしとぞ

獣類にして其恩を知ること此の如し況して人にして忠義の心なくて可ならんや

猫

猫に家畜猫と野猫の二種あり家畜猫は諸子等の常に見るが如く頭圓

く体毛軟にして種々の色あり性質猾狡にして盗心あれども外貌の温和なると鼠を捕ふるに巧なるが爲めに家に養はれ食ふに魚あり寢るに巨燵あり之を犬の終夜戸の外にあるに較ぶれば其幸福なること遙に優れり諺に犬を飼ふこと三日にして其恩を知る猫を飼ふこと三年にして其恩を知らずと云へり然るに犬は床下に伏して猫は却て床の上蒲團の中にあるは誠に倒事ならずや是れ猫の貌の優しきことは犬の武骨なるが如くならざれば自ら婦人や小兒に愛せらるゝなり

猫の外貌かく温和なれども其鼠を捕ふるときの如きは物陰に身を潜め漸く近づくを見れば飛び掛りて之を攫み取る其勢の猛しきこと爪牙の鋭きことは恐るべきものなり諺に又曰ふ鼠取る猫は爪藏すと誠に彼の綿の如き柔なる雪の如き白き毛の中に鋭き爪の藏れあらんとは誰も思ひ掛けなき處なり

猫の最も著しき性質は一旦養はれたる家は幾年立ちても能く記憶するにあり故に猫を携へて遠きに至りて放ち置くも直に故の居所に歸り來り決して忘るゝことなし

諸子試みに猫を捕へて暗き處に携へ行き激しく其毛を倒に擦りて見よ忽ち火花の散るを見るべし是れ此動物は「ゑれき」を含むこと多ければ其火花は雷鳴のときに見るゝ電光と同じものなり

野猫は山林の中に住み毛は家畜のものより較長く巧に樹木に攀ぢ上り鳥類及小き獸類を殺して食ふ元來家畜猫は此野猫を捕へて馴らしたるものより漸々繁殖したるものなりと云ふ

猫の貪慾にして盗心あることは諸子等の知れる處にして動もすれば人の隙を伺ひ厨に入りて今や料理せんとして俎の上に置ける魚を盗み去るは誠に悪き所作なり諸子等の之を悪み賜ふも無理ならぬことなり

然れども昔より猫にも恩を知り義を知るものも亦間々なしとは云ひ難ければ諸子等も一概に猫は狡猾なり猫は盗心ありと悪み賜ふ勿れ

左に擧ぐる實話は我國と西洋とにありしことなり

昔し大坂の葉山町と云ふ處に鍛治八兵衛と云へる男あり家固より豐なりと云ふにはあらざれども夫婦暮しのことゝてさして衣食の道にも事欠けず睦じく暮せしが只不自由なき中に一つの欠けたるは子なきことなり由て妻は知れる人より一匹の兒猫を貰ひ之を我子の如く愛で慈しみて育てしが猫も能く主人に馴れ親しみ晝は膝の上を離れず夜は蒲團の中に主人と一つ寢し三歳餘りの月日も過ぎにけり

然るに其歳の夏の頃妻は斗らず病に罹り醫者よ藥よと手を尽せども定命來れる時なるか更に効もあらばこそ病は次第に重り行き最早起

つべふも見へざりければ或夜病人は愛する猫を枕邊に呼び寄せて頭を撫でゝ言へるよふ汝畜生とはいへ生あらば能く我が言ふ事を聞けよかし我が此度の病氣は迚も全快の程も覺束なし我れ死せるの後は我が如く汝を愛し養ふものもなしされば今より何方へなりとも行き て良き主を求めて愛せられよと我子に言へるが如く涙とゝもに言ひ聞かせければ猫は頭を垂れて肅然として主婦の言を聞き居りしは畜生ながらも其意を悟りし如くなりき

頓て妻は死して野邊の送りの其時となりしが猫は死人の籠の後前に附き纏ひ追へども拂へども附き從ふにぞ嚴しく叱りて追ひ返しければ猫は詮方なげに家に歸り佛前にて舌嚙み切りて死したりと

●猫金絲雀の難を救ふ

西洋の或國に「ありす」と云ふ者あり「なん」と云へる猫を畜ひ置きたるに

或時叔母より金絲雀を遺られたり「ありす」は此金絲雀を「なん」の捕らんことを恐れ初めの程は籠に入れて高く窓に懸け置きたるがいかにもして鳥と「なん」とを馴させて見むと思ひ時々餌を一つの器に盛りて飼ひ又金絲雀を「なん」の脊に止らせなどせしが半月計りも過ぎて互に馴れ親しみける故に時には一と間の内に放ち飼ひたり

或日例の如く金絲雀を籠より出して床の邊りを飛び廻らせなどし居たるに「なん」は不意に飛びかゝり口に啣みて机の上に躍り上れり

「ありす」は驚きて汝の擧動如何なることぞ速に其鳥此所に落せといへども放ちもやらず捕へんとすれば手の及ばぬ處に飛び上れりいかなれば遽かにかゝる所爲をばするならんと不圖傍を見るに開け置きた る窓より他の猫の入り來りて此鳥を食はんとなしたるを「なん」は其危難を救はんとして啣みて飛び上りしなりさてはと思ひ直に其猫を逐

ひ出して戸を閉ぢしかば「なん」は降り來りて疵をも附けず其鳥を「あり
す」の側に落せるに鳥もさして怖れたる樣子も見へざりしとぞ

●鼠

此獸は其種類殊に夥しく全世界至る處鼠のあらざる地なし其大なるものは八九寸小なるものは一二寸に過ぎず毛色も種々にして通常は褐色に灰色を帶へども又黑きあり白きあり班のものあり多くは家屋倉庫等を以て常の住居とすれども又野に住めるものあり山に住めるものあり土中に潛み隱るゝものあり性臆病にして人の日に觸るゝことを好まず然れども夜中人靜まるの後は厨庇の隙間などより跳り出で食物を求む若し猫の聲を聞くときは慓き怖れて潛み隱れて復た出づることなし

通常好みて食するものは穀類菓物の類なれども元來食を貪るものなれば凡そ食ふべきものあれば務めて己れの巣に引き込みて之を貯ふ此獸の前齒は絶へず生長するものなり故に若し之を磨り去ることなければ漸々前方に伸び出でゝ終には食物をも取ること能はざるに至るこれ此獸の暇あるときは木板に穴を穿ち器物を噬りて其齒を削り去ることを務とする所以なり

今此屬類の重なるものを擧ぐれば鼠、鼷鼠、水鼠、香鼠、劍鼠等なり

●水鼠

此獸は常には陸地に住めども水上を泳ぎ水中に潛り入ること頗る巧にして屢々淡水に入りて魚類を捕へ食ふ歐羅巴亞米利加の各所に產す其性質習慣などは通常の鼠と異なることなし

●香鼠

此獸は北亞米利加及歐羅巴の北部の寒冷の地に產す其大さ兎の如く

其齒の鋭きことは宛も刃の如し常に河邊に穴を堀りて其中に住む其毛皮は帽子手袋等を製すれば價甚だ貴し此屬中に尾より麝香の如き香を發つものあれば斯くは名づけたるなり

●劒鼠

此種類は歐羅巴の北部に産する獸にして体の長さ五寸許り毛は褐色にして黑き點あり其後足は前足より稍長ければ走ることは頗る速なり

此獸は住居の地に於て食物の乏しくなるときは幾百万群りて他の地に移り住することあり其移りて他に行くときは晝間は休息し夜間に至れば方陣を作りて進行す其行進を初むるときは途中に如何なる障り物あるも決して路を廻らず一直線に進み退くことなく湖河に逢へば水中に躍り入り泳ぎて前岸に渡り舟に逢ふも避くることなく舷を

攀ぢ登り跳り超へて前進す又路上に積み上げたる枯草などのあるときは其中に嚙み入りて通り拔け決して迂回することなし故に此獸の移住したる通路は田を荒し畑を荒し農夫の害をなすこと一方ならず且其移住の際同族互に戰爭を始め數百萬の劒鼠嚙み合ひ組合ひ之が爲めに斃れ死するもの時としては萬を以て數ふることありて數里の間の空氣を汚すことありと云ふ

●馬

獸類の中最も世を益する多きものを問はゞ必ず牛馬を以て答ふるより外なし實に馬は人間の寶庫なり人間の貴重すべきものなり其性の勇壯活潑にして怜悧敏捷なる他獸の及ぶ處にあらず平時にありては荷を負はせ車を引かしめ之に乘り之に田畑を耕へさしむる等其功用一〻擧ぐるに遑あらず殊に戰時に使用して彈丸雨の如く飛ぶも硝烟

雲の如く立ち昇り砲聲雷の如く震ふも少しも恐るゝ氣色なく屍を踏み刃を冐して突き進み飛び廻る勢は虎豹の如き猛き獸といへども及ぶ處にあらず然れども常には最も温順にして能く主人の使命に從ひ少しも勞を厭ふことなきのみならず永く主恩を記して忘るゝことなし

此獸は世界各所に產し其種類も多けれども概して暖國のものは大きくして寒國のものは小なり毛色も亦種々樣々にして白きものあり黑きものあり班なるもあり首には長く垂れたる長毛あり之を鬣と云ふ其足は只一つの蹄を見るのみなれば又單蹄動物の名あり世界の中最も良馬を產するは亞剌比亞國なり此地に產するものは筋骨逞くして普通の馬よりは大いなり我國にては奧羽地方に產するものを以て最良とす

馬主人の命を救ふ

亞細亞の西南より亞非利加の北部には數十人隊を結んで馬及駱駝に荷物負はせ交易のため深く內地に入り込むものあり之を隊商と云ふ或時此隊商の一組「だまするかす」と云へる地に出發せしが途中にて「あぶらす」と名づくる一群の盜賊に出逢ひ悉く其荷物を奪ひ取られ多くの隊商は皆縛せられたり

然るに茲に又隊商等の斯る難に罹ることあるを保護するために「たーきー」の騎兵は隊を組みて廣野の間を乘り廻るものあり今や此騎兵は折善く此處に出逢たれば直に「あらぶす」の盜賊を取り圍み敵對するものは切つて棄て逃るゝものは追ひ捕へ多くの賊は皆囚れ人となりたり其賊中に「はつさん」と名づくるものあり此者は久しく飼ひ馴らせし一匹の馬を持ちしが共に「たーきー」騎兵の陣營に送られ

たり

其夜「はつさん」は手足を縛せられたる儘天幕の外に暴され夜の更け行くに從ひて四面寂として人も馬も寢靜りたる頃に至りければ「はつさん」は悲しさ遣る方なく明日は我命の終るべき時ならん其れにつきては女々しき事ながら我妻や子は如何に我上を案ずるならん我亡後には如何にして此世を送るならん之を思ひ彼を思はゞこれさでなせる罪業の今や我身に報ひ來りし時なるべしと獨り悔ひ獨り悲しみ居たりし折柄一聲高く嘶く馬あり「はつさん」は之を聽くに正しく己れの愛馬の聲なりしかば今一度愛馬を見たきものなりと千々に心を碎けども奈何せん手足は繩目の苛責を受け居ることなれば身動だもならず如何にもしてと終に縛せられたる儘轉び〳〵て漸く繫げる愛馬の許に至りたりさて「はつさん」は馬に向ひて云へるやうのう吾が愛する處

の馬よ汝は明日より「たーきー」人の手に落ちて其不潔なる廐に於て「たーきー」の馬と共に繫がれ粗末なる秣に於て養はれん我の汝を見ることも今を限りとす汝生あらば今一度我家に飯り我妻に語れ良人は「たーきー」の手に捕はれて空しく刑場の露と消ゆるぞかし我亡き後には一遍の會向も唱へ呉れよ又我兒には父の今はの極の願にせめては正業に立ち歸り父の是までなし盡せる罪業の萬分一なりとも消滅せしむるこそ父に對してなせる孝行は之に過ぎたるものな

しと語り呉れよと人に物言ふ如く泣々馬に言ひ聞かしめ繋げる馬の繩を嚙み切りて放ち遣りたり馬は主人の語るを解せしもの〻如く悄然として頭をうなだれ居たりしが頓て主人に近寄りて左顧右顧と見回らし主人の足の瘡重く迚も立つこと能はずと思ひしや腰の周りの革帶を確と嚙へ一足飛びに飛び出し野山の嫌ひあらばこそ直前突進數十里の道を僅の間に驅り來て我家の戸前に達し徐かに主人を其處に置き終に倒れて死に〻けり

「はつさん」の妻子は此物音に戸外に走り出で夫を助けて内に入り有りし次第を詳かにしたれば共に出で〻死したる馬に胞き付き涙を流し聲を揚げて歎きしかば近隣のもの等も集ひ來り事の樣子を打ち聞きて野蠻猛暴人を殺して財を掠むる盜賊なれど馬の忠實に感じて袖濡さぬものはなかりしと

●馬恩に報ゆ

佛蘭西の軍隊に屬する一士官某なる人あり此人久しく飼ひ馴らせし一馬あり頗る鋭敏にして能く主人に服し從ひ常に主人を乘せて馳り走るを此上なき樂とせり然れども他人の乘るときは或は跳ね躍り或は後へに退きて如何なる馬の巧者なるものも心の儘に御すること能はざりけり

昔て佛蘭西と西班牙との間に戰爭起りしかば此士官も一隊の兵を率ひ此愛馬に乘りて出陣せがし両國の戰爭は最も烈しくし殆んど三年の長き月日を經たり其間此士官は砲烟の中を冒し銃丸雨下の間に馳りて敵陣を破ること屢なるも其身の危きことも亦幾回かありし然れども此馬は常に主人を愛護し主人をして能く安全を保たしめしは全く此馬の働と云ふべし

然るに此士官は不幸にして最後の戰爭に敵の銃丸に中りて終に討死したりしが馬は死したる主人の側に立ちて數日を經るも更に動かず鳶や烏の來りて死屍を啄かんとするものあれば馬は之を逐ひ拂ふを以て務とせり此間食ふべき秣もなく飲むべき水もなければ次第に弱り行けども尚其側を離れず此時近邊の土人等は此馬を得んとして大盟に秣を盛り之を與へしに馬は飢渴に堪へざりしかば土人の與ふるまゝに之を食ひたり此隙に土人は轡に繩を懸け食ひ終るを待ちて牽き行かんとし追へども打てども更に動かず土人は止むなく其日は空しく家に歸りたり

翌日も亦前日の如く如何にもして此馬を獲んと秣を與へに來りしに馬は只之を食はざるのみか其一人を蹴り倒し暴れ廻る勢の當り難く土人も終には持て餘し其儘になし置けり

然るに此馬は尚も其場を離れず幾日となく主人の屍を守り己れも終に飢へて其處に死したりと云ふ

●牛

前にも云へるが如く牛馬の世を益することは實に諸獸の冠たるものなり田を耕へし車を引き荷を負はしむるは馬と同じけれども其性質の温順遲鈍にして馳り走るに適せざれば之を軍隊には用ふる能はず然れども其肉及乳の美味にして滋養多き一段に至りては馬の及ばざる處なりされば世益の多少より言ふときは牛馬相等しきものと云ふも可なり

此獸の胃は他の動物とは異なりて四つに分る卽ち瘤胃網胃重瓣胃皺胃の四つとす食したるものは第一の胃に下り次に第二に移り是の處にて軟きものとなり再び口中に吐き返し細かに嚙み碎きて第三の胃

に送り遂に降りて第四の胃に移り初めて全く消化を終るものなれば此属の動物を反芻獸とは云ふなり

牛属も此種類多く今其重なるものを擧ぐるときは尋常家畜牛亞米利加に産する獅牛亞非利加及印度に産する水牛等なり

●獅牛

此獸は亞米利加の各所の郊野に住し好みて燒け後の野に生ずる軟き草を食とす其運動するときは數百頭群集し正しく隊伍を整へて進行し途中に大河あるも更に恐るゝ氣色なく直前進行して少しも順列を乱さず游ぎて之を渡ること恰も平地を行くが如し

性質は臆病にして獵夫に追はるゝときは奔りて河水の中に沒入す然れども若し創を蒙るときは臆病の性も忽ち狂暴となり角を振り立て獵夫に向ふて突き掛り甚だ危險なりと云ふ

亞米利加の土人は其肉と皮とを得んが爲めに斷へず此獸と爭鬪をなす之を捕ふるには土人は馬上に弓を持ち直に射りて殺すあり或は廣き間に柵を廻らし其中に追ひ込みて之を捕獲することもありと云ふ

●西班牙の鬪牛

歐羅巴洲の西南方に西班牙と云へる國あり此國には一種他の國に異なりたる鬪牛の遊戯なるものあり此遊戯は古代羅馬及希臘などの國々に盛に行はれしが後の世に至りては諸國皆之を禁止せしにより當時にありては只此國と亞米利加のめきしこ國に其例を殘すのみ西班の人民は老幼男女貴賤貧富の差別なく國民擧げて此戯を好み其觀場に群れ集ること宛ながら狂へる人の如く秋夏の數月間は國都及諸洲の都會に行はるゝを常とせり

其觀場は廣大なる圓形の回廊を設け一万以上の見物人を容るゝに足

らしむ鬪牛の當日に至れば都と鄙の區別なく見物人の集ひ來ること蟻の甘きに就くが如くさすが廣き觀場も錐を立つべき際もなき程なり

やがて合圖の喇叭響くとゝもに其技を觝ぶるものは古代の衣服に身を飾り太く逞しき馬に打ち跨りて長き鎗を持てるもあり又徒歩にして大布を携ふるものあり數人列を整へて徐々と場中に入り來れば一方よりは强く猛き大牛を率き來り場の中央に至る比乘馬のものは鎗を揮ふて之に當り徒歩のものは布を

以て大牛の面に覆はんとし追ひつ追はれつ場中を馳け廻る若し大牛傷を蒙るときは狂ひ猛りて角を揮り人と馬との嫌なく突き立てまくる勢は宛ら獅子の暴れたる如し或は馬腹を貫くあり或は人を懸けて空に投げるもあり其危きこと實に言ふべからず人牛互に血を濺ぎ終に奮ふて牛を斃すに至るときは群集手を拍ち聲を揚げて賞賛し觀場之がために鳴り渡る

凡そ此技を演ずるの日は通例一週日とし一日に八九頭若しくは十餘頭の牛を殺すを常とす其盛なる技場に至りては一週百頭を殺すことありと云ふ

● 羊

羊は身の長け三尺餘り頭と口は長く四脚も亦長し体毛白色にして縮れ卷き牡には三角の角を有す其曲れるものを綿羊と云ひ大にして前

に曲れるを山羊と云ふ両種とも山中に住むものと家に畜ふものとあり

綿羊は美麗なる上品の毛を生ずるが爲めに最も愛し養はる性質極めて温順にして毛を刈らるゝときも屠場に率かるゝときも只人の爲るがまゝに任せて毫も荒れ廻り或は逃るゝなどのことはなし故に西洋の人は綿羊を能く悟りを開きたる僧に比すと云ふ

山羊は綿羊に比ぶれば性質較荒く其山に住めるものは好みて岩石嶮しき山の頂きに攀ぢ登り或は千丈の深き谷に臨みたる巖の端に安然として眠れることあり

西洋にては貧人は山羊を畜ひて牛に代へ其乳を絞り取る是れ其畜ひ易きがために貧人には甚だ適當なるものなればなり且其毛は綿羊の如く良品ならざれども又種々の織物に用ふ殊に其肉の美味なること

は綿羊に勝ると云ふ

●狐

鼻尖り耳尖り顔長くして尾の繁りたる獣と云へば問はずして諸子等は狐なりと答ふるならん實に狐は犬に似たれども其顔つきの異なる一見して之を區別し得られん如何にも狡猾らしき顔付なり其心も狡猾なることは凡ての獣の王と云ふも可ならん

此獣は地球上寒き國と熱き處とを問はず至る處に住すれば其種類も亦夥し今一二の種類を擧ぐれば尋常狐黑狐北極狐銀狐等あり多くは山林原野の間に住し地中に穴を穿ちて居處とす其穴は四通八達獵夫の此處に追へば彼處に逃れ彼處に追へば此處に逃れ容易に捕へ得ること能はず晝は穴の中に眠れども夜間に至れば田畠の間を遊行し鼠小鳥などを捕へて食ふ時には人家を窺ひ雞及其卵を窃み去ること

あり其忍びて人家を窺ふときは人もやあらん犬もやあらんかと最も用心に用心を加へざれば入ることなし斯く疑心深きにより之を捕へんがために設けたる蹄綱にも容易に陷ねることなし

諸子野邊に狐を見るとき試みに之を追ふて見よ誠に惡むべき擧動をなす奴なり他の獸は追はるゝときは眞直に逃れ我々の影も形も見へざる處まで至るか或は巣の中に逃れ隱るゝとも狐は左にあらず追へば逃れ少しく追ふ者と距つるときは後を顧み此方を眺め此處まで來ひと云はぬ計りの素振をなすことこそ實に心惡き奴なり

諸子等は外國には蛇を祭り鰐魚を神とし蛇に卷かれて死し鰐魚に呑まれて成佛すべしと喜び安んずる國人ありと聞くならば如何に之を思ふならん愚とするか賢とするか諸子等は定めて之を笑ふならん

諸子よ決して笑ふ勿れ愚とするなかれ之を笑ひ之を愚とするは所謂

猿の尻笑と云ふものなり

諸子顧みて我國の風俗を見よ到る處に祠を建てゝ正一位白川大明神正一位高倉大明神正一位何々大明神とさも恭々しく鏡餅を奉り赤飯を供へて時々の祭禮怠らざることを見るならんそして其本体は如何なる尊き神樣なるかと問はゞ皆鼻尖り耳長き狐殿に外なし全体狐殿に如何なる功勳ありて何處より此尊き位を頂戴せしか國家大功勞ある三條實美公も正一位此耳長き鼻尖りたるこん〳〵さんも同じ御位なりとは誠に分からぬことならずや

元來稲荷大明神とは五穀を保護する神と稱し第四十三代元明天皇和銅年間に之を山城の伏見に奉祠されたるを始とす然るに民間には狐は稲荷明神の使なり之を粗末にするときは祟あるなど言ひふらしたる處より此狐殿を祠ることゝなりたるものにして實に狐殿は故なく

赤飯の馳走に逢ひ揚豆腐の御供へにあづかる幸福ものと云ふべし

又我國の風として昔より狐が化ける狐に誑かさる狐が乘り移るなど言ひ囃し非常に之を恐るゝ人多し外國にてはあらざる例なり是れ外國の狐は馬鹿にして日本の狐は賢きによるか外國の狐も日本の狐も狐にして二つあらず外國の狐は化けずして日本の狐のみ化け外國の狐は誑かさずして日本の狐のみ誑かすと云ふ道理は萬々あるべからず是れ皆習慣のなさしむる處にして祖父祖母の寢物語りに狐が化ける狐に誑かさるゝなどのことを聞きたることの自然と頭に滲み込み自らも狐は化けるものなり狐は誑かすものなりと迷ひ信ずる故に少しく怪しき事に出で逢ふときは狐が化けたり狐の所爲なりと思ひ神經の作用より狐に似たる行をなし人も亦彼れは狐に魅られたりなど云ふに至れるものなり諸子等は學校に入り理科の一端をも修め

たる學生なり努め是等の浮説に迷ひ賜ふなかれ

昔より白き狐を白狐と稱へ幾百千年の長壽を保ちたる狐と稱し最も之を尊びたる風習あれども白き狐は別に珍らしきものにあらず北方寒帶の地方に至れば白き狐は通常のものにして之を北極狐と云ふ凡て寒國に住する禽獸類は其羽毛の白きもの多し元來白きものは体中の温度を外に放ち出すこと少なきものなれば寒國にありて禽獸類の白きは遇然のことにあらず皆造化の妙機によりて斯くは作りたるものなり

銀狐と稱する狐は亞細亞の北方及亞米利加に産するものにして毛色は黑色なれども其尖きは白色にして輝々たること宛も銀色の如し故に之を銀狐と名づく其毛皮は價頗る貴くして他の狐の皮よりは六倍乃至七倍の價ありと云ふ

●狐と鶴

狡猾なる狐或時鶴に出逢ひて云へるやう拙者は今日珍らしき佳殽を得たれば君と共に之を食はんとす御差支なくば明日午餐に來らるべしと鶴は狐の厚情を謝し直に之を承諾せり

偖翌日鶴は約束の時間の來りければ衣服を飾りて狐の舘に出掛くれば狐は最と擲寧に玄關まで出迎ひ鶴を請じて奥坐敷に通しやがて恭々しく珍膳を捧げ來りしかば鶴は如何なる珍らしき馳走ならんかと窃かに樂みつゝ席に着きしに膳の上に列べたるは皆薄き平たき皿にして中に旨き肴の汁のみなり狐は一禮して云へるやう今日君を御招待申せしは此汁を參らせん積りなりまだ〳〵澤山用意しあれば御遠慮なく召し上るべし拙者もこれにて接伴仕らんと己れの前に置きたる皿の汁をさも旨そうに舐りけれども鶴は己れの口の細く長ければ

此平き皿の汁を汲ふには頗る困難にして狐の二皿三皿も舐り尽す間に鶴は漸く半皿の汁も汲ひ得ず誠に不愉快なる顔付にて其日は遂に飯りたり

二三日を經て鶴は狐に出逢ひて言へるやう此間は誠に御馳走に預り千萬有難く存ず然るに拙者も今日他より佳味の品を到來致したれば今夕御來臨ありたしと請ずるに狐は前きの返報をするならんと思へども辞むは何とのふ卑怯に當れば彼れ何程の事をかなし得んと早速に承諾して夕方より鶴の舘に出でにけり

暫ありて鶴は膳部を持ち出でしに此度は前と反對にて食物を入れたる器は皆細き長きこと宛も徳利の如きもの計り鶴は狐に向ひ一禮して云へるやう今夕はやうこそ御來臨被下て誠に滿足に存ずさて拙者の君に進めたき佳肴は其器の中にあれば御好次第に召し上がるべし

拙者もこれにて接伴せんと長き嘴を器の中にさし入れ息も續がずに食へども狐は器中に鼻を突き込みたれども漸く舌の尖きに上汁を舐め得る位なれば飢へたる腹も滿し得ずすご〳〵として我家に歸りしとは最と心地よきことにこそ

●狐烏を欺く

或朝一羽の烏何がな食餌を求め得んとて彼方此方を飛び翔りしにとある人家の軒に沙魚の串に剌して乾しありしを見付直に飛び來りて窃かに其一つを奪ひ掠め仕合よしと遙か彼方の森に至り他の朋達に見付られじと茂りたる樹蔭を撰み止りて食はんとせし折柄一匹の狐ありて速くも之を見出し如何にもして彼れを奪ひ取り呉れんとやがて樹の下に至りたれども固より狐は樹に攀ぢ上ること能はざれば兎やせん角やせんと案じ煩ひ居たりしが忽ち一の奸策を思ひ付獨り心

に頷づきて烏に向ふて言へるやう烏君よ余は常に思ふ世に禽鳥類は多けれども君の衣の黑々として光り澤ある美しさにはよもや及ぶものはなからん實に君は良き衣服を着けたり君程幸福なるものは又と世界にあるまじ余は常に羨めりと頻りに褒めそやしければ烏は漸く自慢の心を生じ頸を回らし己れの羽を顧みるにぞ狐は窃かに我術策の略なりしを喜び尚も語を巧にして云へるやうそれのみならず君の音調の美しきことは又羽の美しさに副へるものと云ふへし余は君の音調を聞く毎に心自然に爽かに憂きことあるも之を忘るゝに至るべし實に君こそ世界の幸福者なり願くば余のために一聲の美音を發する惜むなかれと最も實らしく賛めそやしければ烏は愈々慢氣をさし我音調は斯程までも美なるかと口に含みし沙魚のあることも忘れ頸を伸して「かー」と一聲鳴きたる機會に沙魚は忽ち地上に落ちたり

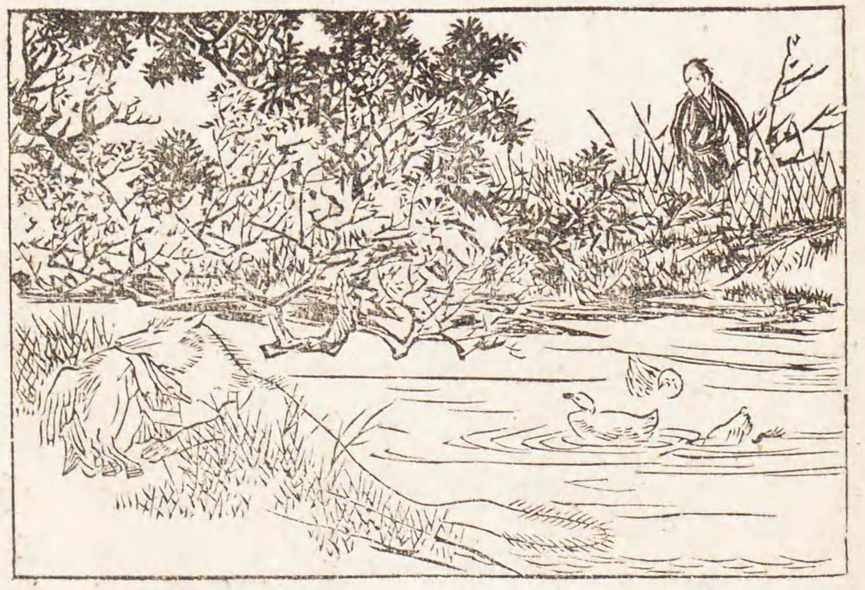
狐はしてやりたりと直に沙魚を啣みて揚々くと我穴さして立ち去りたれば烏は欺かれしことを初めて氣付深く己れの慢心を生せしことを悔ひ我れと我でに聲高く「あはーくく」と鳴きしとぞ

●狐水中を潜る

狐は陸上の動物にして水には入るものはあらずと思はるれども狐の中には水を泳ぎ水を潜るに頗る巧なるものあり

嘗て一農夫あり家に畜ふ處の鵞を池に追ひ入れ池中の小魚を捕り食はしめしに鵞は彼方此方に泳ぎ廻り或は水中に潜り入りなど最樂しげに遊びしに一羽の鵞の頭を先きに水中に入るゝことなくして足より不意に水底に沈みて再び上り來ず農夫は不審に思ひ如何になしたらんと考へ居たる中に又もや一羽の鵞の前の如く俄に水中に沈みたるに農夫は愈々怪り眼を凝して見詰むるに遙か彼方の岸邊に當り一

匹の狐の鵞を啣みて上るを見たれば農夫はさてはと大に怒りたれど暫く怒りを堪へて狐の擧動を見ぬ振して窺ひ居しに狐は其れとも露知らで奪ひ取りたる二羽の鵞を畔の下の穴に隱し枯草もて之を蔽ひ仕濟したる面持にて何れへか立ち去れり農夫は之を見て池の邊りを廻りて向ひの岸に至り二羽の鵞を取り戻し舊との如くに枯草にて穴を蔽ひ又仕濟したる面持にて元の處に歸り來て尙も狐の擧動を竊に伺ひ居たりしがやがて前の狐は二匹の朋達を伴ひ來り



穴の下に至りたるは全く此鶩の馳走を仲間に振れ舞はんとの心なるべしさて枯草を發きて鶩を出さんとせしに思ひきや鶩のあらざるに呆然として手持不沙汰の樣子なりしを他の仲間は之を見て笑ふが如く罵るが如き素振にて立ち歸りしは餘處の見るめは可笑かりしと之等は人が狐を誑したるものと云ふべし諸子等も狐に誑さるゝなどの忘想を止めて一番狐を誑すことを考へ賜ふべし

●狸

狸は狐の如く大ならざれども其狡猾なる一段に至りては狐に劣らぬ程のものなり晝は山野或は古き家屋の古穴に住し夜に至れば出でゝ食物を求むる獸なり其常に食する處のものは大低狐と仝樣なり此獸も昔より化ける誑すの話は多くあれども皆取り止めもなき浮言なり萬物を主どる人間を誑す獸があらばそれこそ此獸が出でゝ世の中を支配し人間が狸の配下に使はるべし如何に愚なる人にても野の穴に住居して蛙や鼠を食とする狐や狸に誑さるゝものあらんや

●海狸

海狸と云へば海に住む狸のやう思はれどもさる譯にもあらず此獸は北方寒帶の地方のみに住する獸にして其形は隨分奇なるものなり長け二尺許高さ一尺許毛色は通例のものは光り澤ある褐色なれども亞米利加の北方に產するものは黑色のものあり白色のものあり或は班のものあり齒は頗る鋭く尾は扁平にして鱗を以て覆はれ後足の指の間には蹼を有す故に水中を游泳すること自在なり此獸は元來池或は河の邊りに數十或は數百群り住むものにして其住居は宛から一の市街をなすと云ふ此獸の住居を造るには先づ川上より岸邊に生ずる樹木の幹を彼の鋭き齒を以て絕へず嚙み去り終には

之を倒すに至る其倒れたる樹木は轉じて川上より流し下流には他の海狸ありて之を受け取り住居を造らんとする上手に長き堤を築く是れ水流の勢を減ぜんがためなり其用意既に整へば河岸に穴を穿ち木片と小石を以て四壁に積み立て泥土を其上に塗り水の浸し入るを防ぐ此時彼の鱗ある平き尾を運轉して泥土を塗ること宛も左官の壁を塗る如く使用す此穴は頗る奥深くして四通八達何れの方へも脱け得らるゝやうに造る若し河水の増して穴の中に浸し入ることあれば上層の居所に移る一戸毎に大低十頭の海狸住し夏時は果實草木樹皮魚類等を食ひ冬季は木材を食ひて生活す

此獸より得る脂は海狸膠と稱し麝香の代りに用ひ種々の疵を治むるの効あり其皮は貿易の重なる品との二つにより土人の海狸を獵することゝ夥し故に歐洲北部の諸國にては年々其數を減ず然れども西比利

亞北亞米利加等にありては尚多く産すと云ふ

鹿

鹿は山野に住むもの多けれども又之を公園に放ち或は家に養ふものあり四肢は細長く毛色は茶褐にして白き班點あり雄は頭に枝を生じたる角を有すれども雌には角なし甚だ老ひたるものに至りては間々其痕を見ることあり此角の生ひ立ちは最も奇妙なるものなり其初めは前頭の上に軟き肉質様のもの突起し伸長するに從ひ其下方より漸々堅くなり遂に骨の如きものに化す其骨に化するときは外皮を剝ぎ去らんがために樹の幹に磨り或は之を突き廻れども角の中には尚血液の循環するものあり然れども十分成長するときは上部は漸く枯れて脆くなり終に脱落するに至る然るときは其下方の生を存する處より漸々に伸長す此角の脱落するは年々の春の時候に於てす初年のも

のは直く且短かけれども次年には稍其長さと太さを増して枝を生ずるに至る

此獸は植物質殊に野菜穀類を食とする故に大に田畑に害を與ふることあり又山林にありては樹の皮木の葉などを食ひ或は角の皮を脱かんがために樹皮を衝き廻るを以て甚だしき害をなす然れども其肉は食として味甘く皮は敷物として價あり其角も亦種々のものに役立ゆへに世を益することも多し

秋の暮諸木の葉に紅色を帶ぶる頃に至れば雄鹿は雌鹿を戀ひて鳴く聲は如何にも憐れに聞ゆるものなれば

奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿の聲聞時は秋はかなしき

など云はれたり

鹿の大なるものは長六尺に餘り角の力最も強く同類互に爭ひ鬪ひ之

がために間々死するに至るものあり今鹿類の重なるものを擧ぐるときは尋常鹿、黑尾鹿、亞米利加鹿、麋、馴鹿等あり

●「らぷらんど」人と馴鹿

諸子等世界の地圖を展べて見よ歐羅巴洲の北方に當り「らぷらん」と稱する小人國あり此國の人を「らつぷ」と稱し最も小き人間なり然れども其丹精にして仕事に勉强することは大人國の人間も及ばず

此國の人は家を造らず小屋を建てず何んとなれば或は山の頂きに或は平原に時に隨ひて其住居を移さゞるべからざる必用あればなり故に一張の天幕を所持し山となく野となく其移り住む處に其天幕を張り其内に食ひ其内に眠るを常とす

此國人の最も貴び最も重んじて寶とするものは馴鹿なり實に此國人は馴鹿によりて食ひ馴鹿によりて衣るものにして神が此國人のため

に此獸を與へたるものと云ふべし

さて馴鹿は我國に住める鹿の一種にして雪積り氷結びたる嚴寒の土地にても其地に生ずる苔を食とし能く生活するものなり然れども夏の來るときは「もすきつとー」と稱する一種の蚊に苦められ平原には住む能はず故に山の頂きの涼しき地に移り住す由て土人は余義なく天幕を擔ひて馴鹿に從ふて山巔に居を移さゞるべからず是れ此國人の家を造らず小屋を建てず一張の天幕を家として冬は平野に住居し夏は山巔に移り住むの止む得ざる處なり

諸子等は此の如き國に住む人は不自由千萬にして不幸なる人間なりと思ふならん然り我國の如き石造木造の美しき家に住み錦を纏ひ常に佳味を食する我々國人に比すれば實に不自由千萬不幸極まる人間なり然れども住めば都の諺にて此國に住む人間は又此國を以て此上

なき極樂世界とし小き天幕の内に馴鹿の皮を敷物とし暖に眠り其肉を食ひて腹を肥し其乳を飲みて甘とす婦人は馴鹿の乳を以て能く乾酪を作る

土人の貧富は馴鹿を畜養する多少による少しく富有の聞あるものは三十頭乃至五十頭の馴鹿を飼ひ養ふ極めて貧しきものと雖も三頭乃至五頭は養はざるものなし物を運送するにも他に出づるにも皆馴鹿に橇を牽かしむること猶我國人の牛馬を使用するが如し

此國は半年は夜にして半年は晝のみなり晝のみの時は野鳥を捕へ海魚を漁ることを以て業とすれども夜のみの時に至れば只天幕の内に住み馴鹿を殺して其肉を食とするもとより燈油もなく蠟燭もなければ薪炭を焚きて光りを取るのみ世界は廣し隨分奇体なる國もあるものにあずらや

●狼

諸子狼と聞けば直に恐怖の心起り今にも食ひ殺さるゝやうに思ふならん實に狼は猛悪恐るべき獣なり其形は犬に類して稍大きく其毛は灰色なり常には深き山の中に住し他の獣を殺して食とし飢ゆるときは則ち人を噬ふ夜更くるとき山中にて此獣の悲しき吼へ聲を發するを聞くときは忽ち肌に粟を生じ物凄きこと實に言ふべからず

西洋殊に佛蘭西國にありては狼の住すること夥しく時には數百或は數千頭群をなてし山中を恣に行き廻ることあり國人の此獣のために害せらるゝもの年々其數を知らず故に政府よりは時々兵隊を操り出し狼を狩らしむることあり又國人の狼一頭を撃ち殺したるものは若干の賞金を得るの規則を立てゝ此獣の撲ち滅し方に力を尽すと云ふ誠に無用有害の獣と云ふべし人の心の邪にして曲りたるものを豺狼

の心と云ふも理あることなり

●童子狼を生捕

魯西亞の某村に「フリっつ」なる男子あり歳十五六の頃或日父の命を受けて隣村に使し事終りて歸りしに思ひの外に手間取りて日は早や暮れて殊に小雨さへ降り添ひければ暗さも暗き眞の暗夜一尺前も見へ難くされど常に慣れたる通路と云ひ性來大膽なる童男なれば左のみ恐るゝ氣色もなく獨り山路を歸り來りしに峠の半腹まで下りし頃行く手の路に燦々としたる両眼の光り輝くを見へしかば「ふりっつ」は立ち止りて瞳を凝しきつと彼方を見結むる中に彼の物は一聲高く吼へて此方に進み來るは正しく狼なりしかば「ふりっつ」は俯向に地に伏したり狼はやがて「ふりっつ」の邊に近づきて後に廻りて足を嗅ぎ前に廻りて頭を嗅ぎしが遂には脊に乗り懸り両前足を「ふりっつ」の肩に懸

け既に噬みつかんとせるを「ふりっつ」は透かさず狼の両前足を確と捕へて立ち上り力を極めて前下方に率きしめて其儘山を下り來る狼は後足にて「ふりっつ」の両足を蹴り之を倒さんとすること屢なりき此時「ふりっつ」の蹶き倒れたらんには空しく狼の餌食となる九死一生の場合なれば必死の力を極めて狼の荷物を脊負ひ遂に我家に歸りけり

此時夜は已に更けたれば「ふりっつ」の父母は「ふりっつ」は親類にて泊りしことゝ心を安んじて能く寢入居たれば「ふりっつ」は門口より母よ今歸りたり早く開け賜へ父よ「ふりっつ」は狼を生捕りたり早く開け賜へと聲を掛けたれど何の應もなし手を以て叩かんにも能はず足を擧げて蹴らんも我身の倒れんことを恐る由て「ふりっつ」は負ひたる狼を以て強く戸を撃ちしかば家内のものは其物音に眠りを醒し只事ならじと父は銃を取り下僕も棒を携へて戸口に走りたり「ふりっつ」は表より

聲を懸け父よ打ち賜ふな吾れは狼を負へり犬よ犬よと叫びければ母は裏口に走り行き此騒ぎに前より猛り吠ゆる二匹の犬の鎖を解き放ち表の戸を開けると共に各外面に飛び出でたり

此時「ふりっつ」は脊負ひし狼を力に任せて地上に擲ちたれば二匹の犬は直に飛びかゝり狼と闘ふこと暫なりしが狼は前きより「ふりっつ」の肩に引きしめられ頗る弱りたることなれば爭でか二匹の猛犬に敵すべき殆んど死に至らんとするを「ふりっつ」は両犬を引き退け犬の鎖を以て狼の頸を縛り庭の隅に繋ぎ置けり夜明けて此評判近邊に高く「ふりっつ」は狼を生捕りたり適れ豪勇の童男かなと諸方より我れも我れもと此狼を見て來るもの引きも切らざりしと云ふ

●灰色狼

亞米利加の「けんたーきー」と稱する地に於ては灰色狼の住すること最

多く豕羊雞鶩等の之がために奪ひ去らるゝこと年々其數を知らず殊に冬季雪降る頃は各所の森は狼の群を以て充さるゝと云ふ程なり此地に胡弓に巧なる「ぢつく」と云へるものあり或時「けんたーきー」より凡そ六里を隔りたる地の或農家に婚禮の儀式のありて「ぢつく」は之に聘せられしかば一つの胡弓を携へて家を出でたり

時尚早春にして雪は地上に積り池の氷さへ未ざ解けやらずぢつくは急ぎ〳〵て路を行くに日は早や西山に傾きて山路に差かゝりし頃は月は林の間に懸り星は頭の上に燦きて只音のうものは松吹風と谷間を流るゝ水音のみ「ぢつく」は婚儀の席に遲れんことを氣遣て只管道を急ぎつゝ峠の半に至りし頃斗らずも隔りたる處に狼の低き唸聲の聞へしが忽ち彼處に應へ此處に應へ漸く此方に近寄り來るにや吼聲は明に聞かれ其數の夥しき幾百とも計れず森の四方は皆狼ならんかと

思はるゝ程なりき「ぢつく」は逃れんとするも他に道なく隱れんとするにも家もなく如何がはせんと躊躇折柄早狼は「ぢつく」の周りを取り圍みたれどさすがに直に飛び掛りもせず頭の上を躍り越へ足の邊りを掠め去り倒さんとすることは屢なれば其恐ろしきこと言はんかたなし「ぢつく」は常に聞く凡て猛獸は此方に臆病心を見すときは却て彼の勇氣を增すことを知りたれば慄ひながらも徐かに歩み少し隔りたる地に古き柴小屋のありしに氣付しかば急ぎ此小屋に達せ

んと稍足を早めて行く機に携へし胡弓の絃の手に觸れて一聲「ぢやん」と響きしに周圍に纏ひし狼は驚き恐れし面持にて「ばつと」立ち退けり「ぢつく」は此不意の出來事に稍勇氣を取り返し力を極めて音高く胡弓の糸を摩り彈くに此物音に狼は近寄りも得せず只四方より聲高く吼ゆるのみ「ぢつく」得たりと益々勇氣を出し烈しく胡弓を摩りながら一足飛びに柴小屋の方に走り行き轉ぶが如く内に入り堅く戸じめて「はつと」一息つぎ居たり然るに外面の方には幾百の狼は尚も「ぢつく」を食はんと群り來りて吠へ叫び小屋の戸も打ち破らん勢なりしかば「ぢつく」は天井の破れより屋根に上りて之を避く狼どもはやがて戸を破り内に群れ入り屋根の破れめより頭を突き出し「ぢつく」の足に嚙み付かんずる勢なれば迚も助り得ざることゝ覺悟を極め再び胡弓を手に執直し之を摩り始むるに又もや狼は驚き恐れて外面の方に走り出で小

屋の周りを取り卷きて靜りかへりて胡弓の音色を聞くものゝ如しそこで「ぢつく」は思ふやう我音曲の妙なるに猛獸どもゝ感じたらん我弓一たび皷すれば鬼神をなかしむとは此ことならんと稍く自慢の心を生じ己れ得意の曲を取り更々すゝりて絶間なし兎角する中に東白くる頃となりしかば狼どもは何れにか散乱し一つの殘れるものもなきに至りたれば「ぢつく」は萬死の中に一生を得て急我家へ歸りけりとぞ

●孝子狼を斃す

信濃の國佐久郡内山村の農夫に總右衞門と云ふものあり其子龜松は父に仕へて孝行比なく遠近の人は之を褒めぬものとてなかりけり此邊は山又山の草深き偏避の地なれば猪鹿の夜な〳〵出でゝ田畑を荒し穀類を害ふこと夥しければ村中の人々申合せ山の麓に茅の廬を設けて順番立てゝ之を守ることゝはなれり

或日龜松は父と共に此廬に守りしが日も早や暮れんとする頃總右衞門は廬の中に伏し居たりしに不意に一頭の狼跳り來り忽ち其足に嚙み付きたり總右衞門は大に驚き起たんとするを起たしもやらず再び其腮に嚙み付きたれば總右衞門はこはたまらじと狼の耳を力を極めて引き攫み聲の限りに叫びたり

此時龜松は廬より少し離れたる處にて草を刈りしに父の常ならざる叫聲に驚きて只事ならじと空を飛んで走せ來りしが此体を見て前後も忘れて飛び掛り携へし鎌もて狼の口に突き入れたれば鎌は忽ち束本より折れにけりよりて傍にありし父の鎌を取るより早く再び狼の口に突き入れて引き倒したれど狼は尙も猛り狂ひて起たんとするに乍側の石を取り上げて二つ三つ鎌の柄を打ちたりければ流石の猛獸も稍勢を失なへり此時龜松はつけ入りて力に任せて拇指を狼の兩眼

に突き込み眼球を抉り出して遂に其狼を斃し父を扶けて家に歸りたり父の傷所も余り深手にあらざりしとや間もなく故に復せしかば一家の喜び言はん方なく遠近擧りて龜松の働きを褒め立てければ其事やがて幕府に聞へ厚く褒美を賜はれり龜松其時年僅かに十一なりしと云ふ

虎と見て岩にたつ矢もあるものを
などか思ひの通らざるべき

と云へるが如く實に一心と云ふものは恐ろしきものなり畢竟此龜松も親を救はんとする一心より年葉も行かぬ身を以て能く此猛獸を斃すに至れるものなり

● 猪

猪も山中に住める猛獸の一つなり体太く肥へたる割合には四脚細く

全体に灰色の硬き毛を生ずれど粗にして往々膚を見せる處あり鼻の生長は最も十分にして大なる力を有す之を以て土を堀り木の根を撥くべし前齒の二つは著しく外に突き出で其鋭きこと宛も刃の如し此獸の胃袋は人の胃袋の構造に稍似たる處あれば植物動物質のものを兼ね食すれども最も植物性のものを取り殊に豆類を嗜む由て田畑を荒し大に農夫の害をなす其肉は牛肉の如く佳ならざれども又鹿の肉には勝る故に獵夫は常に之を獵す若し銃丸を受けて手負となれば縱横無盡に驅け廻り人と犬との嫌なく牙に掛くるを以て頗る危險なり通例此獸の大さは長け三尺乃至四尺位なれども又非常に大なるものは六尺に余れるものありて殆んど牛の如し夫の仁田四郎の富士野の獵に打ち斃せしものゝ如きは隨分大なるものなりしならん

昔て佛蘭西にて掘り出せし猪屬の骸骨は其大さ最大なる象にも劣らざる程のものにてありしと云ふ

豚

豚は元來野生の猪より變じ來たれるものなれど今は人家に畜ふものゝ外山野に住めるものはなきに至れり形は猪と全じけれども牙は猪の如く鋭からず鼻も亦甚だ強からず毛色は種々にして白きものあり班のものあり性質愚鈍にして何たる食物を撰むことなく凡そ石瓦などの齒牙に合はざる物を除けば食はぬと云ふものなし

豕の肉は猪肉の如く美味なれど肉の中には往々蠅蟲を含み居ること多ければ能く煑たるものにあらざれば傳染の恐あり支那人は好みて豕の肉を食し凡そ膳部のものに豕の肉のあらざることなき位なり

此獸は性質頗る愚なる丈ありて其感覺も鈍しと見へて臀の肉或は股の肉など少し切り去りても瘡口に泥土を塗り置くときは漸々其疵口

は癒ゑて舊の如くに肉を盛るに至る此脂は膏藥を製するには最も適當なるものなれば藥舗に於ては欠くべからざる品なるべし

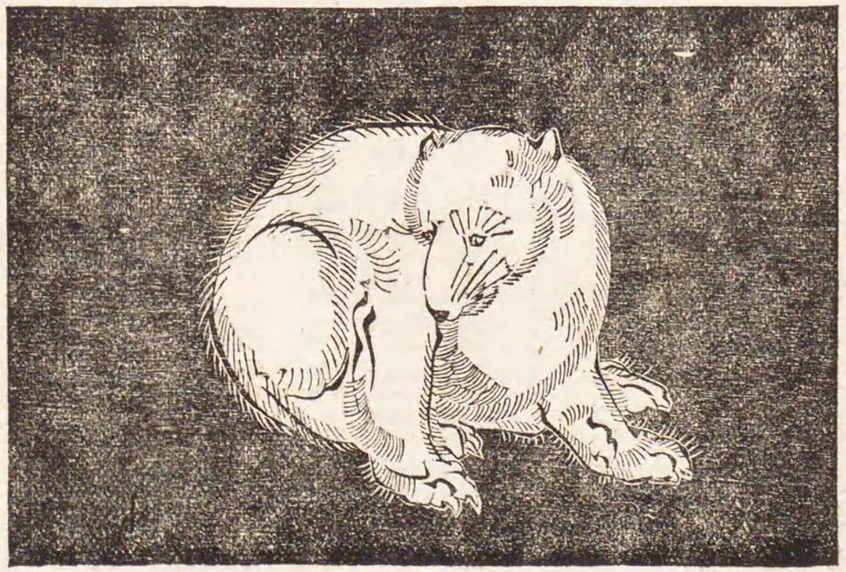
●熊

諸子等は博物場内の動物園中に就き鐵柵の中に閉ざゝれて諸子等が柵の前に立つときは頭を振り手を出し食を求むる大熊を見しことあらん毛色褐を帶びたる黒色にして体太く爪鋭く若し此獸をして自由に柵外に出でしむれば其猛烈なること如何ならんとは諸子等の想像する處なるべし

此獸は多く寒國に住む獸にして熱國には住まず故に我國にても北海道に多くして南方諸國には少なし常に深き山林幽谷の間に穴居し植物を常食とすれども饑ゆるときは往々人里に近き處に來り野菜を食ひて田畑を荒し人家に忍び入りて食を掠むることあり北海道土人の

如きは熊のために鯡の樽詰を盗み去らるゝこと往々ありと云ふ其盗み去るには樽を肩に擔ひ後足にて歩むこと恰も人の立ちて歩むが如しされど寒氣漸く加り積雪山野を埋むるときに至れば樹のうつろ或は岩の穴に身を隠して出づることなく春の來るを待ちて再び出で〻食を求む

其皮の敷物となり其胃の藥劑に用ゐることは諸子等の知る處なるべし熊類の最も著しきものは熊、黒熊、灰色熊、白熊等なり



●白熊

白熊は北極近傍寒帶の地に住し熊類の中最も大なるものにして身の長け一丈二尺に及ぶものあり常に海上數十里の外に漂へる氷の上にありて海豹海狗の出づるを窺ひ之を捕へ食ふこと甚だ巧なり性頗る猛暴なれども非常に其兒子を愛す土人若し其子を捉ふれば母熊は銃丸をも恐れず鎗刀をも避けず何處までも追ひ來り其兒子を取り返さゝれば止まず土人は之がために重き傷を蒙り死に至ること少なからずと云ふ

●義熊

今は昔越後國魚沼郡妻有の樵夫一日薪を採らんとて雪車を引て出で山に入りしに村に近き處は皆伐りつくしたまゝ〳〵あるも足塲あしきため山一重越て彼方を見るに薪とすべき柴の數多ありし故やがて其

處に車を引き行きて雪車歌うたひながら徐に取りて車に積み元來し方へ降りたるに一束の柴の車より轉び落ち谷間を埋めし雪のわれめにはさまりたれば捨ても飯らんも惜しければ其處に至り柴の枝に手をかけて上げんとしたる其はづみ足に蹈力なきゆへ己れの力に己れが体を轉して遙かの谷底へ墜ちけるが雪の上に轉んだる故幸ひに疵は受けず、しばしは夢のようなりしが漸く心付き上を見れば屏風を建てたるが如く今にも雪頽れやせんと生きたる心地はなく暗さはくらしせめては明りの方へ出でんと雪に埋もれる狹き谷間を傳ひ行きよう〳〵にして空見る所に至りたれど寒氣强く手足は氷へ一歩だにもはこび得ずかくては凍へ死すべしと心を勵し猶道あるかと百歩余りも行きしに瀧ある方に至れり四方を見るに谷間の途極にて壺に落ちたる鼠の如く如何ともせんすべなく只惘然として胸せまり思案さへ

出でざりけり

さて傍へを見るに潜るべき程の岩穴あり中には雪もなき故入りて見るに少しは温なり此時心づきて腰を探りみるに握飯の辨當もいつか落してあらざりけりかくては飢死すべしと氣もそゞろさりながら又氣を取り直し雪を嚙みても五日や十日は命あるべし其内には雪車の歌の聞ゆれば我里人に相違なし大聲揚げて叫びなば助くるものもあるべしと心に神や佛を祈りつゝ遂に其日は暮れにけりよりて此處を寢所とせばやとて闇地をさぐりて這ひ入ることは不思義にも次第に温氣を増しければ尚も進みて奥深く入り辿み見るに手先に觸れしは正しく熊なり樵夫は驚き恐れて胸も襞けるやうなりしが逃れんとするにも道もなくとても命の期なるべしと自ら心に死を極め漸く心を落ち付けて其處に跪き云へるやういかに熊どの我は此山近き里に住

むものなるが今日しも薪をこらんとて谷間に落ち此始末皈るに道なく食ふに糧なし迚も死すべき命なれば襞きて食へば食ひ賜へ若し情あらば助け賜へと怖々ながら熊の脊中を撫でければ熊はむつくと起きなはるよと見へしが頻りに樵夫を推して已れの伏したる坐に進むるにぞ樵夫は其なす儘に從ふに其坐の暖きことは巨燵にあたるが如し熊は又手を上げて樵夫の口に柔かに推し當ること屢々なりし故不斗蟻のことを思ひ出で試みに舐りて見るに甘くして少しの苦みあり頻りに舐れば心も爽に咽も潤ひしに熊は鼻息を鳴らして寢ねるやうなりさては我を助くるならんと心大に落ちつきて後は熊と背をならべて臥しゝが宿のことなど思ひ出で眠りもやらず夜の明るを待ち穴を這ひ出でゝもしや皈る道もあるか山に登るべき藤蔓にてもあるかとあちこち見れどもなし此時熊も穴を出でゝ瀧壺に至り水を飲みし

が其大なること牛の如しやがて水を飲むにも飽きたるにや又もやもとの穴へ入りし故樵夫は穴の口に居て雪車歌の聲やすらんと耳を澄して聞けども只瀧の音のみにて鳥の音も聞かず其日も又空しく暮れて穴に夜を明し飢ゆれば熊の掌を舐りて幾日となく此に住へども歌は聞へず其心の細きこと言はんかたなしされど熊は次第に馴れ親しみ可愛くなりたり始め熊に遇ひしときはもはや死地と覺悟し命も惜しくなかりしがかくなりて見れば次第に命も惜しくなり助る人はなくとも雪さへ消ゆるときは木の根岩の角にも縋りてなりとも宿へ歸らんと雪の消ゆるを待ちわび幾日と云ふ日さへ忘れて虛しく暮しゝが谷間のことゝて雪の消ゆるも里より遲く只日のたつのみ嬉しくありし或日穴の口邊に風をひねりて居たりしに熊は穴より出でゝ頻りに袖を咬へて引きゆくにぞそがなすまゝに從ひしに始めすべり落ち

たるはとりに至り熊は前に進み自在に雪をかきはり一つの途を開くにぞ何方までもと從ひ行けば人の足跡ある所に至りしときは熊は樵夫の顏をながめ別れを惜しむが如き有樣なりしがやがて走り去りて其行方も知れずさては我を導きたるならんと熊の去りし方を伏し拜み急ぎ我家に歸りしとぞ

●旅人と熊

西洋の或國に「クウヰケット」と「ブラッガート」なる二人の朋友あり或時二人打連れだちて山中を旅せしに「くうゐけっと」は性來臆病なるものなれば「ぶらっがーと」を呼び止めて云ふやう君見賜へ此に熊の足跡あり察するに此山中には熊あらん我は此山路を通ることを恐るゝと「ぶらっがーと」は答へて云へるやう君恐るゝなかれ我の伴ふ上は如何なる猛獸の來るとも我は見事之を打ち殺すべし我の腕には骨あり我

の心は鐵よりも堅し君幸に心を安んじ賜へと如何にも男らしく高言せしに忽ち近き森の中より熊の唸りの聞へしかば「ぶらっがーと」は逸早く傍の松の樹の上に攀ぢ上りたり「くうねけっと」は元來「ぶらっがーと」の如く輕捷なるものにあらざれば迚も樹の上に攀ぢ上ることは叶はず逃れんにも速かに走ること能はざればきっと思案を定めて直に地上に倒れ伏し息をこらへて恰も死人の始くなし居たり頓て森の中より身の長六尺もあらんと思しき大なる羆の見れて進み來るにぞ「ぶらっがーと」は樹の上にありて慓ひながら見下ろすに羆は倒れたる「くうねけっと」の側に來り耳の邊りを頻に嗅ぎ回はりたり此時「くうねけっと」の心の中はたして如何ならん實に生きたる心地はせざるべしされど一層息をこらして正さしく死人の如くなし居たりしが羆も今は誠の死人と思ひけん再び森の中に走り入りにけり「ぶら

っがーと」は之を見樹の上より降り來り前きの高言にも似もやらず畀性未練の行ありしを少しは耻ぢたる面持にて諧謔もつてこのことを打ち消さんと思ひ「くうねけっと」に向ひ云へるやう今熊は君に如何なることを耳語しやと問ひければ「くうねけっと」は答へて曰ふやう熊は今後君等の如き薄情なる人間と交るなかれと耳語きたりと

●兎

兎は山野に住むものと家に畜ふものとあり何れも自在に動く長き耳ありて眼は頗る大きくして外方に突き出ず故に後前を一時に見ることを得れども非常に大なるがために眠れるときも瞼は之を蔽はず前脚は後脚より短き故に山を登るは頗る遠なれども下るときは甚だ遲し獵夫の之を捕へんとするときは先づ山の麓より追ひ上げて一人は山の頂きに待ち搆へ急に追ひ下だす故に兎は轉び輾びて終に獵夫に

獲らるなり

此獣は性質最も臆病にして少しの響を聽くも長き耳を欹たて〻忽ち逃れ走る足蹠には軟き皮を以て包まる故に走るとも少しの音を立てず

家兎は元來山兎より變じたるものなれば山兎と異なりたることなし只山兎の毛は茶褐色なれども家兎の毛は白色黒色班等の種々あるの差あるのみ

山に住むものは多くは夜間に出で〻草の根樹の葉或は穀物などを食ふ肉は頗る美味にして毛は軟なり此毛を以て筆を製し皮は革として手袋を製す

栗鼠

栗鼠は深き山に住む獣にして容貌鼠に似て尾は頗る長く太く殆んど

全身の長さに等しく毛は赤褐色にして腹部は白し

性質活潑にして大概樹の上に住み後脚の上に己れの体を据へつけて前足を手の如く使用して果實なんど食ふ有様は最と愛らいしゝ

夏秋の頃に木の實を集め古木の穴に貯へ置くゆへに冬季雪降る頃に至りても食糧に乏しからず其肉は頗る美味なれば獵夫は好んで之を獵す

此獣は捕へて籠の中に畜ふも少しも憂ふる氣色なく愉快に車を廻し梯子を昇るなどの戯は家畜の鼠と異ならず

亞米利加の西の方に住める黒色栗鼠と云ふものは屢〻劍鼠の如く群りて他處に移ることあり若し途中川に逢ふときは長き尾を後に立てゝ帆に代用して水の上を群り泳ぐ狀は隨分珍しき觀物なりと云ふ

獅子

凡そ陸上に住める動物多けれども最も猛しきものは獅子なり身の長五尺より八尺に至る毛色は鹿の兒の如く尾の端は流蘇の形をなす牡獅の頸には長き鬣あり爪と牙とは頗る鋭く歩むときは此爪を掌の中に収めて少しも音を立つることなし實に其容貌と強猛と云ひ百獸の王と稱するも無理ならぬことなり

此獣は亞細亞の南方より亞非利加及亞米利加などの熱國に産し常に深林岩窟の間にありて夜に至れば出でゝ食餌を求む

獅子の吼聲は宛ら雷の如く此吼聲は獅子のためには甚だ有用なり何んとなれば他の獣類は此吼聲を聞くときは慄き怖れて穴より逃れ出で他に走らんとして却て狼狽して逃げ道を失ひ遂に獅子のために食はるゝこと多ければなり其食とする處は大低鹿羊の類なれども時として飢ゆるときは人里の近傍に來り牛馬を運び去り或は人に逼ることあり

獅子は此の如く猛暴恐るべき獣なれども之を飼馴らしむるときは極めて從順にして飼主を戀ひ之に親むの性あるものなり

獅と奴隷

昔「かるせーじ」と稱する地に「あれどろつるす」と名づくる奴隷あり此奴隷主人のために酷く追ひ使はれ勞苦に堪へずして遂に主人の家を逃れ出で都市より五六里も隔りたる山中に身を隱し數日の間は此處や彼處に漂ひしが飢へに逼りて漸く体も弱り行くにゞ一つの洞穴を見出して茲に其身を寄せしが數日の疲れに寢るともなしに眠りたり

稍ありて不意に獅子の吼聲に驚かされて眠りを覺すにこはそも如何に大なる獅子の穴の口に突立ちて此方をきつと見結むるにゞ奴隷は慄き恐れて生ける心地はあらばこそ身は早獅子のために身は寸斷に

せられたるやうに思ひ色青ざめて伏し居たり

然るに獅子は其猛暴なるに似もやらず徐かに奴隷の前に歩み來て前片足を重く擧げ頗りに之を示すにぞ奴隷は少し首を擡げて伺ひ見るに其手の掌のたゞ中に太き荊の立ちて甚だしく肉の膨れ上がり居りしかば怖々ながら其足を捉り之を拔き取りやりしに獅子は尾を振り耳を帖れ奴隷の手足を舐りつゝ如何にも喜悅の色を現したり

奴隷は漸く蘇生の思をなし居りしに獅子は直に穴を出で何れよりか鹿の子を咬へ來り引き裂きて奴隷に進むるにぞ饑飢に堪へざる余り之を食ひて漸く腹をいやしたり其後此有樣にて獅子と共に一つの洞に相住みて羊や鹿の生肉を食として二月三月を送りけりされど何時までも斯くてあるにあらざれば終に獅子に別れを告げ此洞穴を出で何れにかたよらんと又もや處々を漂ひしが終には警吏のために捕は

れて獄の中に繫がれたり

元來此國の習慣として主家を脫れし奴隷は獅子の餌食に供する猛惡非道の刑罰なりしかば此土人の處刑も之に極はれり

さて處刑の當日となりしが奴隷は木柵を以て圍れたる刑場に引き入れられ悄然として佇み居りしがやがて一隅にある獸欄の口を開くや否や恐るべき猛しき獅子は躍り出して爪を磨き齒を鳴らし今や奴隷の身を寸斷にせらるゝならんと數萬の見物人は手に汗を握り靜りかへりて見結めしに不思議なるかな獅子は奴隷の足下に至り耳を帖れ尾を搖かし寃も愛狗の主人に懷くるが如くなりしかば獄吏を始め柵外の群集は奇なり〳〵と呼ばぬものとてなかりけり警吏は奴隷を面近く呼びて樣子を質せしに奴隷はありし次第の始終を涙と共に語りしに數萬の見物人は事の奇遇なるを感じ皆大に叫びて云へるやう獅

子と奴隷を免すべしと呼ばゝる聲は山谷に響きたり是によりて官も亦遂に奴隷の罪を赦し獅子と共に放免せしが奴隷は厚く官の情を喜び獅子と共に刑場を出で行きしとぞ

●獅狩

英國の「りびんぐすとん」なる人曾て亞非利加洲の内地を探らんとて中部亞非利加まで深く入り込みて我土人の家に宿したり此近傍は殊に獅子の住めること多くして屢々出でゝ家畜を害し人を襲ふにぞ土人は大に之に困めり

「りびんくすとん」は之を聞き土人に告げて曰へるやう獅子は其仲間の一二を殺さるゝを見るときは相率ひて他處に移るものなれば一度之を獵るに如かず左なくばますゝ横暴を極め全村他に移り住まざれば獅子の害を免るべからざるに至るべしと最と懇に勸めしかば土人

も直に同意して其準備をぞなしにける

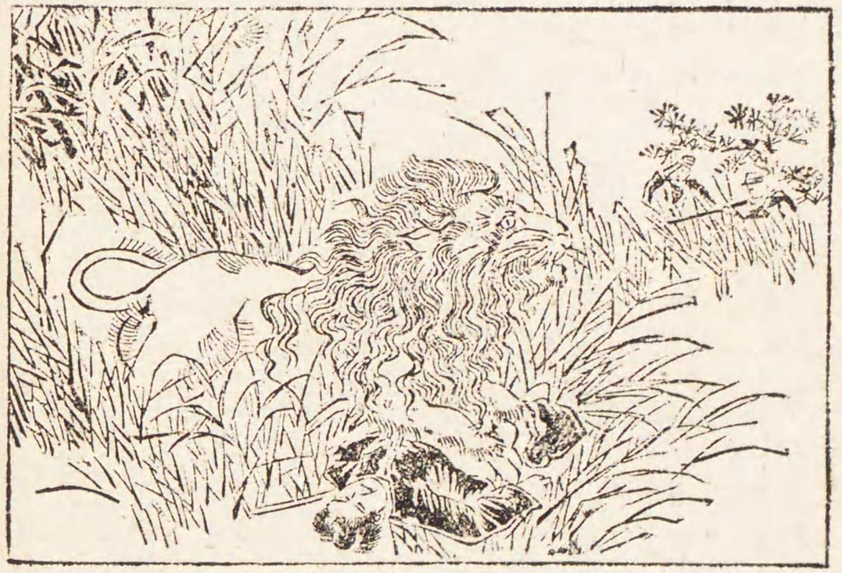
さて一両日を距てゝ「りびんぐすとん」は屈強なる二人の土人を從へて村里を離るゝ凡そ二里許りもあらんと思はしき小山に入り行きし此山は立木とてはなく只處々に矮樹を見るのみにて格別獅子の住もうべき處もあらざりしが漸々奥深く入り込み見るに行手の傍に一つの穴ありて其口には狐の頭猿の足などちらばりて落ち居たり

茲なりゝと三人は低聲つゝそつと穴の口邊に佇みて暫く内の樣子を窺ふに一匹の獅もあらざる樣子なり

「りびんぐすとん」は除かに土人と共に少し距りたる木蔭に身を潛め獅子の歸るを待ち居けり兎角する中土人は眼速くも獅子來れりゝと低語にぞ木蔭の隙よりそつと向ふを眺むるに早三百尺の内に一匹の牡獅と二匹の牝獅とあり牡は中央にありて口に鹿一匹を啣へて鬣を

振り乍ら進み來るに左右に隨へる牝は嬉しげに之を眺め雀躍しつゝ並び走せり

「りびんぐすとん」は時分を量りて土人に命じて云へるやう子は彼の左の牝を擊べし余は牡を斃さんと二人齊しく發砲せしに土人の放ちし銃丸は誤たず牝獅の急所を打ちたれば轉倒してもがき呻めける其聲の凄まじこと云はん方なし然るに「りびんぐすとん」の放ちたる銃丸は如何に狙ひの違ひしや牡獅の左の前脚をかすり遙か彼方の岩角に當りたり



此物音に牝獅の一は何れへか逃げ去りしが手負の牡獅は益々哮り眞一文字に躍り來て「りびんぐすとん」を地上に倒し腰の圍りを嚙へ宛から犬の鼠を嚙へて振れるが如く二間も彼方に跳ね飛ばし今や二の丸迄みて放たんとする土人に飛び掛れり此時一人の土人は携へし槍も力を極めて牡獅の胸を貫きしかばさすがの獅子も此傷手に弱りしか終に地上に倒れ雷の如き叫聲を發して死にけり

「りびんぐすとん」は腕と腰とに十一ヶ所の齒創を受けたれど幸に着けし衣服の厚かりしかば思ひしよりは創淺く數日の後に癒へたりと

●獅鼠に救はる

或日一頭の獅子ありて己れの穴の口邊に眠りしに一匹の小鼠の來りて或は獅子の脊に上り或は其尾にそばへなどして戯れ居りしかども獅子は少しも心に懸けざりし然るに鼠は大膽にも終其鼻尖きに上り

たれば獅子は赫と怒り前足もて小鼠を攫みたり鼠は苦しさの余り叫く々と泣き叫ぶ聲の如何にも憐れなりしかば獅子は之を放ち遣れり鼠は獅子の寛仁なるを喜びて幾度となく其恩を謝して叢の中に入りにけり

斯くて數日を經て此獅子土人の懸け置きし蹄に係り逃れんとするも逃れ得ずもがき苦しむ其折柄何れよりか前きに放ちたる小鼠の來りて此締の太き網を嚙み切りて遂に此獅子を逃れしめしとぞ

虎

諸子等猫の爭ひ鬪ふを見たることあらん其聲の恐しく其眼光の鋭きことは誠に平生雪の如き白き軟なる毛を以て体を覆はれぐるぐと咽を鳴して人の膝に上り媚ひ從へる狀とは天地雲泥の相違あり若し此獸にして長け五六尺もありしならんには其猛烈にして眞に恐ろしき獸ならんとは諸子等想ひ見るべし彼の亞非利加洲及其諸島に住める虎こそ卽ち其獸なり

實に此獸の形狀は猫に似て長け五尺に余る性質の殘忍なることは獅子にも勝る獅子は其飢ゆるにあらざれば人を害することは少なけれども虎は肉を欲せざるときも好んで生物を殺害するよりて土人の虎を恐るゝことは獅子に勝る此殘忍非道なる性質に引き替て其毛皮の美しきことは殆んど他の獸に於て見ざる處なり卽ち黄色にして黑き條を交へ其上頗る軟かなれば之れを敷物となすには至極適當せり

虎の子を捕へて養ひ馴すときは其天性には似もやらず最と從順に飼主に馴れ親しむことは宛ら犬の如くなるものなり

豹

猫類の獸の中虎に最も能く似たるものは豹なり其身の長けは三尺上

り四尺に至り毛皮の色は虎と同じく黄色なれども黒條なくて薔薇の如き班あり尾は甚だ長くして黒色と白色の環をはめたるものゝ如し此獸の形は斯く虎よりも小なれども其殘忍なる性質に至りては虎にも劣らず羊や猴の獸を捕へて殺すは頗る巧にして之に及ぶものなし之を養ひ畜ふときは少しは馴るれども動もすれば其本性を見すことあれば誠に危險なりと云ふ

養虎本性を見す

昔て印度に富有なる農夫あり一つの虎子を購ひ得て久しく養ひ馴らしめしに虎も能く主人に親しみて主人の外に出るときなどは後や前きにと附き從ひ家にあるときは傍に踞り食物なんどを與ふるも主人の手より食ふなど宛ながら我々の愛犬の我々に戀ひ親しむが如くなりきされど性質殘忍なるものは時には其天性を見すことあるはさす

が畜性のかなしさとて眞に是非なき次第なり

此主人或夏の霄余りの暑さに堪へかねて書室の椽端に椅子持ち出で丶之に倚り左手には小說を取りて之を讀み右手は椅子の側に垂れ居たり虎は此時常の如く主人の側に踞り頗りに主人の手を舐りしが其舌のわさびをろしの如く粗ければ何時となく手より血汐の滲み出でしかば忽ち其本性を現して低き唸聲を發するにぞ主人は之に心付き斗らず其方を眺むるに已れの右手より血汐の流れ落るに驚きたりされど今不意に起たんには却て虎の怒りを激し躍り掛りて食ひ附かんことを恐れ故意に心を落付けて滴る血汐は虎の舐るに任せつゝ靜に次の間に眠りたる僕を呼べり僕は目を摩りながら應と答へ此方の書室に入り來るに主人は靜かに〳〵と聲を掛け「ぴすとる〳〵」と云ふに僕は此体を見て打ち驚き直に主人の意を酌みて徐かに書室を出で

ゝ奥の間指して走り行けり此間主人は尙も虎の舐るに任せたる心の中こそ想ひやるべし僕は「ぴすとる」片手に追取りて急ぎ次の間まで走せ來り確と狙ひを定めし上「ずどん」と一聲放ちしが丸は誤たず虎の胸を射通したれば恐ろしき叫びの聲と共に其塲に斃れて死にゝけり

●巴提使大虎を殺す

其昔今の朝鮮の三韓と云ひし比新羅の國は度々我々に叛くのみならず任瑯の國に冠なして我が鎭府をも冐せしかば時の帝欽明天皇は痛く御怒りあらせられ當時無雙の剛勇と呼ばれし膳臣巴提使なるものを仰せて將軍とし多くの兵を率き連れて彼の三韓にをし渡り新羅の無禮を責めけるが彼の國人どもは巴提使の勇氣に恐れけん間もなく降服したりけり

此將軍の彼の國にありし時一夜已れの愛する實子を失ひければ大に

驚き悲みて此處や彼處と探せども更に行方の知れざりけり然るに陣營の外面の方に虎の足痕あるに斗らず氣付もしやと思ひて其足痕に從ひ行きしに果して山の半服に一つの穴ありて其口邊には愛子の衣服の寸斷にしたるきれ〴〵の落ち散り居たりしかば巴提使は怒れる眼に血を濺ぎ我子の仇は此奴なりとやがて劍を引き拔きて穴の中に入らんとせしに中より一頭の大なる虎の顯れ出でゝ口を開きて飛び懸れり巴提使は得たりと身をかはし透さず左の手にて虎舌を攫みしがさすがの猛獸も此大力には放ち得もがき苦しむを直に右手に携へし劍を取直し束をも通れと虎の胸を貫きて一擊の下に之を刺し留めて其皮を剝ぎて陣營に持ち歸りしかば彼の國人ばらは之を聞き舌を卷きて慄き怖れしとぞ

●朝鮮に虎多し

豐臣大閤秀吉公の朝鮮國を征伐ありし時加藤清正は其先鋒の大將ゝして彼の國に推し渡り向ふ處は敵するものなく朝鮮人は悸き怖れて鬼將軍と稱したり今に至るまで鬼將軍と云ふときは小兒の泣きをも止むると云ふ

清正公の朝鮮にあるとき或山の麓に陣を敷かれしが此邊りは猛虎頗る多く時々出でゝ人馬を害することあり或日清正の近侍の士上月左膳と云ふ人は陣營の外にありしが一頭の大虎現れ出でゝ不意に左膳に嚙み付きたれば逃るゝ遑あらばこそ左膳は憐れにも終に此虎のために食ひ殺されて空しく非命の最後を遂げにけり

清正公は之を聞き大に怒られ已れ目に物見せて呉れんずと翌日士卒に令を出し其陣營の後ろの方にある山を取り圍み狩りたてければ果して一頭の大虎茂りたる茅排し除けて眼を怒らし荒れ出でたる其勢

中々當るべからず

清此公は少し小高き丘の上に大砲据へて丸を込め待ち構へしかば虎は益々怒りて口を張り後足にて人の如く立ち上り唸り叫ぶにぞ衆くの人は爭ひて銃口向けて撃たんとす清正は大聲叱して衆を止めて云へるやうしばらく我技倆を見るべしと未だ言の切れざるに轟然一聲の響きと共に丸は飛びて虎の口に入りければ虎は直に仆れて又起き上り轉輾身をもだへて終に死したりけり

又黒田長政の陣營は全義舘と云へる處

にありしが或日曉天の頃人聲喧しく陣中大に擾動しければ長政は必定敵の攻め來しならんと樓に登りてきつと彼方を見渡すに敵にはあれで大虎の厩に入りて馬を嘶へて去らんとするにあり菅政利と云へる士は直に大刀引き抽きて左はさせじと逐ひ驅けゝれば虎は哮り狂ひて政利に飛び付かんとするを政利得たりと身をかわし躍て虎の頭に斬り付けしに虎も巧に身を轉じ尚も嚙み付んとし政利殆んど危く見へし處々後藤基次之を見て横合より鎗を伸べ虎の肩を突きしかば政利之に力を得てゑいと掛聲諸共に虎の眉心に斬り付けゝれば流石の猛虎も此深傷には堪へずして斃れて其處に處にけり

長政二人を面近く召して曰へる貴殿等は敵に臨みて一手の大將となり兵を指揮する重任を負ひながら其身を愛することを知らずして猛獸と雄を爭ふは吾れ之を悅ばずとて深く二人を戒しめしとぞ

象

陸生動物の現在世界に住めるものゝ中最も大なるものは象なり此獸は亞細亞及亞非利加の両大洲に產し身の長け一丈余りあり毛色は通常灰色なれども稀には白色のものあり白色のものは甚だ貴び重んせらるゝ其足は太く短かく鼻の長さは四尺乃至五尺あり力は極めて强くして善く手の用をなし之を以て樹木を引き拔き針の如き小きものをも拾ふべし食を取るにも水を飲むにも皆此鼻を使用す上腮の兩側には長き牙ありて色白く質農密なれば種々の細工に用ゐてよし之を象牙と云ふ

常に江河の近邊の林の中に群り居て處々方々を徘徊す其際は隊長と思ぼしきものありて他の象どもは其後へに從ひ行くも止まるも皆其指揮に從ふ

通常食物とするものは軟き草樹の根及葉なれども時としては大樹を引き拔き其液多き根を食ふことあり

其性質は極めて從順にして養ひ馴し易きのみならず又最も鋭敏にして能く主人の語音を理解し深く其恩を記す故に象の産する國にては我々が牛馬を使用する如く種々の働きをなさしむ且つ其力は非常に強くして大低二百四五十貫の荷物を運搬せしめ得べし

昔は之を戰爭に使用し兵卒並に兵糧を運送せしめしとぞ此獸の戰場に趣くや能く人命を重んじて決して道に倒れたる手負の人を蹈むことなく其鼻もちて徐かに傍に卷き除けて通り過ぐると云ふ

象狩

此大なる此力強き大獸を狩り捕ふるには如何なる方法を用うるならんとは諸子等の定めし聞かまほしく思ふ[illegible]ならん余は茲に野生の大象を狩り捕ふる方法の大略を解きて諸子等に語るべし

野生の象を狩り捕ふるには豫め善く馴らしたる牝象を要す即ち此牝象を媒として牡象を誘ふにあり亞非利加の獵夫は常に牝象に乘りて野外の象のある處に出で此處彼處を徘徊する中に野象を見れば直に牝象より下りて之を放つ牝象はやがて牡象のある方に進み行く時は牡象は喜びて此方に來る此時牝象は強て野象の心情を動さしむるゆへ牡象は傍に獵夫のあるを忘るゝに至る獵夫は牡象の牝象に親しみ狎れて前後も知らざる善き時機を伺ひ窃かに牡象の足に堅固なる繩を縛し其一端を大樹の幹に堅く結び付く牝虎は獵夫の此仕事の成就したるを見れば此方に歸り來るにぞ牡象も亦之に隨はんとすれども何時の間にか已れの身は大樹の幹に繫がれたれば隨ひ行かんとするも得す大に怒りて如何なる大樹も引拔かんか如何なる堅き繩をも斷

ち切れんかと思ふ計りに猛り狂へども放ち得ず力漸々弱り行き稍怒りを靜めたる頃獵夫は木の葉枯草などを與ふれども最初の程は之を食ふのみか蹂躙散布して怒れども時を經るに從ひ饑餓に逼り來れば獵夫の與ふるに任せて之を食ふかくて日を經るに從ひて漸く獵夫に馴れ親しむに至る此時繩を解き牝と共に家に率き歸る善く馴れたる牝象は好みて此職分を盡すと云ふ

曾て印度に一貴人あり此人新たに一頭の牝象を買ひ求め常に郊外に乘り出でゝ遊びけるに一夜此象は如何になしたりけん御者の隙間を伺ひ繫げる鎖の付きたる儘逃れ出でゝ歸り來ず主人は處々手を分けて探せども其行方更に知れざりける

然るに凡一週間もたちし比突然此象の歸り來りければ主人は大に喜びて其翌日も亦乘りて郊外に出でしに牝象は頻りに草木の繁茂る地

に進み行くにゞ御者は行らじとあせれども止り得ず益々草深き方に分け入りて御者も亦如何ともせん術もなく只象の行くがまゝに任せつるに或大樹の下に至りて止りぬ主人は斗らず其處を見るに大なる牡象の鎖もて足を縛せられ大樹の幹に繫げるものあり主人は怪しく思ひ近より見るに其鎖は我牝象を家に繫ぎし鎖なりしかば主人は全く我牝象の所爲なることを知り其怜悧なるに感じたり思ふに此牝象は前飼主の許にありて牡象を獵り捕ふるに馴らされたるものならん

●象憤りて死す

又曾て印度にて或大船を引き下ろすに一頭の象を使用せしことありしが元來此事は太だ其力に過ぎたれば象は如何に力を盡すとも引き下ろすことは能はず此時飼主は象の怠惰にして之を爲さゞることゝ思ひ大に罵りて此懶惰もの奴と一鞭強く打ちければ象は大に憤り二

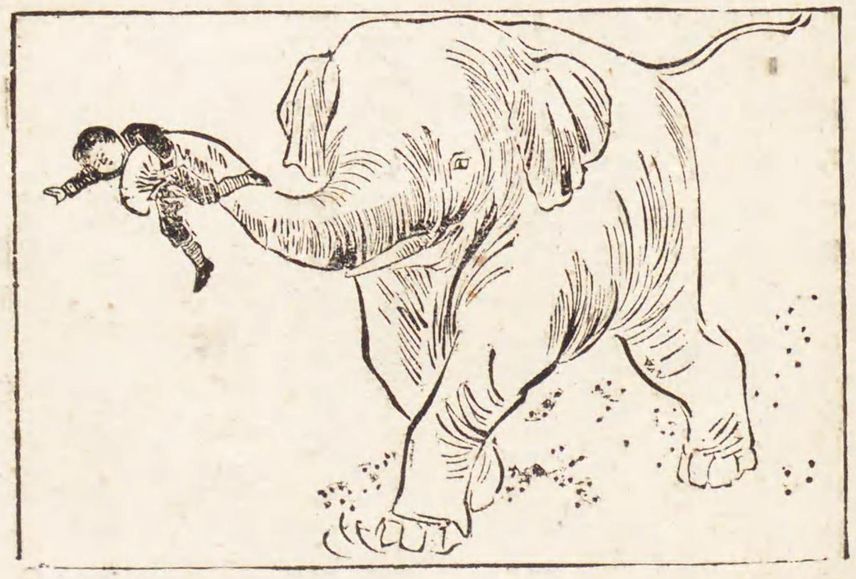
倍の力を出だして引きしためつゐには其頂の骨を折りて直に斃れ死したりと

●象恩を知る

又印度の或町に養ひ馴らされたる一象あり時には町中を徘徊し彼方此方の飲食店の前に至りては物欲しげに其店前に立止るを常とせり此町中に寡婦の一人の小兒を連れて青物店を出すものあり象の店前に立つごとに野菜の切れ端或ひは青菜の殘れるものなど與ふるを例とせり

或時此象は如何になしたりけん常ならず怒りを見し狂ひ猛りて此町中を驅け廻るにぞ町に居並べる出し店のものらは大に驚き遽てゝ店を取り片付家の内に入るものあり或は象のために蹈み倒され代物を微塵にせらるゝものありて一市の混雜言はん方なし此時彼の寡婦も

常の如く小兒を連れて店出しけるが其れと見るより手早く店の品々籠に投げ込み軒下に逃げ入りたれど狼狽たる余り我子を店の側に寢させ置きしを忘れたれば大に驚き再び出でゝ其子を抱へ入らんとする其時遲く彼の時早く怒れる象は早眼前に狂ひ來り愛子を救ふに遑あらずあわや小兒は象のために蹈み潰ぶされなんと泣き叫びしに勢込んで來りし象は其小兒の許に來るよと見へしが怒り狂ふにも拘はらず一足蹈み止まり鼻もて小兒を捲き上げて向ひの家へ



の屋根に置き又荒れ廻りて進み行きぬ是れ全くは此象の常々寡婦の惠みを記し怒れる中にも斯くの擧動ありしものなりと人々感じ敢へりとぞ

●象仇を報ゆ

又印度に「でるはい」と云へる土地あり此邊は殊に象の多き地にして較富みたる家には養ひ馴らし之を使役し之に乘り野外に遊行するを常とせり

此地に住める裁縫職人に某なるものありき此職人の門前を毎日通行せる一象あり或日某は一の果物を投げ與へしが其れより後は毎日通行するたびに格子の間より鼻さし入れて食物を求むるを例とせり某も亦何がな食ひ殘りの物を與へしが或日象は例の如く鼻さし入れけるに生憎與ふべきものもなかりし故戯れに針もて鼻頭を刺しければ

象は其儘立ち去れり暫ありて何れよりか十分汚き泥水を鼻に含み來て格子の際より某に吹き懸けゝり某は左ることあらんとは露知らず一心に仕事をなし居たりしに不意に泥水をあびせられ頭よりずぶ濡れとなるのみならず得意先よりあづかりたる大切なる衣裳をも汚されて大に後悔したりとぞ

●駱駝

駱駝は亞細亞の西南土耳其亞剌比亞波斯などの熱國地方に住める獸にして身の長八尺許りに毛は淡褐色を帶ぶ背には瘤の如く隆く起れる肉ありて宛も馬背に鞍置きたるが如し由て之を肉鞍とぞ呼びなせり此肉鞍は全体脂質よりなりたるものなれば食に乏しき時も之より養ひを取る故に數日の間食はざるも飢へ死するなどの憂なし

又駱駝の種類により肉鞍に一つのものと二つのものとあり即ち波斯

及土耳其に住めるものは一として亞剌比亞亞非利加及印度の地方に住むものは二つあり

此獸は服中に一種奇体の水袋ありて之に水を飲み貯ふときは十數日の間をも一滴水を飲まざるも渴へて死することはなし

且其足蹠は柔くして宛ながら椅褥の如くなるゆへに堅き砂地を歩むにも決して足を傷むるの憂なし

駱駝はかく大獸にも拘はらず性質極めて温順に能く主命に從ひ大概三四十貫の重荷を負はしむべし其荷物を積むときは脚を屈めて跪きて之を受く若し荷物の目方己れの力に副ふときは直に起ちて歩めども其力に余れることあれば過ぎたる荷物を取り除けざれば決して起つことなしと云ふ

隊商

亞剌比亞及亞非利加などにありては廣漠無限の大沙漠ありて其大なるものは東西は百里南北四百里もある處あり此等の國の人々は此大沙漠を横切りて遠く内地に入り込み土人と通商交易するもの多し其行くときには數十人乃至數百人隊を結びて數十日の食糧と野宿に用うる帳幕等を用意し晝は此水もなく草もなき沙漠の中を旅行して夜は沙漠の中に寐ね數十日を經たる上始めて望む處に達すべし是宛も萬里の大洋を横切りて遠き外國に至ると異なることなし之を隊商と云ふ

沙漠の中には處々に草木生ひ茂りて清水の湧き出づる土地あり誠に神の是等の國人のために與へたるものにして之を泉地と名づく是れ猶大洋中に島あるが如く只水と陸との差別あるのみ隊商は此地に至り欠乏したる水を汲み入るゝを常とせり

斯の如き土地なれば一人や二人にては迚も旅行は覺束なし途中暴風の吹き起り砂礫を卷きて地に埋めらるゝことあり土蠻の群り出でゝ荷物を襲ひ掠むることあり夜中獅子荒れ出づることもあればなり

駱駝は前に言へるが如き形体なれば此沙漠を旅するには最も適當人用のものなり故に隊商どもは各々駱駝の背に打ち跨り之に貨物を負はしめ之に糧食を積み込みて旅行するを常とす啻にそれのみならず其乳と肉とは常食に充て其毛は織りて衣服に製す實に之等の地方の人々は駱駝によりて其生命を保つものなれば最も此獸を貴重して神聖の獸或は沙漠の舟と稱するも誠に理あることなり

●駱駝追

曾て亞剌比亞の「がさ」と呼べる地に住める「はさん」と云へるものありき此者は砂漠の間を旅行して「するゑす」の地方に往來し土人と貿易する隊商の荷物を運送するを以て己れの職業となせり

「はさん」には妻と「ありー」と名づくる一人の子あり家固より富めるにはあらざれども節儉にして能く働きしかば漸々暮し方も豐になり此頃にては貯蓄の金もて一頭の駱駝を買ひ求め益々手廣く旅客の荷物を扱へり

「ありー」は明けて十五の春を迎へし頃父は例の如く隊商に從ひて「するゑす」の地方に旅立しけるがこたびは余り積むべき荷物とてもなかりしかば駱駝は家に遺して行けり「ありー」は母と共に留主を守り懇に駱駝の世話などなし居たるにやがて時日も立しころ一組の隊商ありて「するゑす」の方より「がさ」に來れり其隊商の中に常々父と懇意にせる駱駝追ありて「はさん」の家に來り父の事傳なりとて言へるやう「はさん」は「するゑす」にて多くの荷物を受け取りたれば次に發する隊商と共に「ありー」に

駱駝を率ひて來るべし我れはそれまで彼の地にて待つべしとの事なれば早く其用意をせらるべしとて駱駝追は歸りけり

「ありー」の母は之を聞きてよし隊商と共に行くにもせよ未だ年棄も行かぬ「ありー」に駱駝率かせて遠く旅立さするも最と氣遣はしきことなりと思ひしかども又思直して「ありー」も早十五の歳を迎ひしことなればあ左のみ案ずることもあるまじと事の次第を「ありー」に告げゝれば「あり一」は聞て打ち喜び我愛する駱駝をひきて遠き砂漠を旅行することゝ未だ見ざる土地を蹈みて夜は帳幕の中に多くの隊商と共に寄り臥すことは如何に樂しきことなるか「するゑす」に行きて久々に父に會する嬉しさなゝと心に充ちて勇々と旅の仕度に走せ廻りけり

さて隊商の出發すべき當日となりしかば市門の外にある井戸の近傍には多くの隊商集りて荷積をするもあれば袋に水を滿たすもありて

旅立の用意誠に忙しゝ年若き「ありー」も共に己れの駱駝をひきて此に來れり駱駝も「ありー」に能く馴れ親しみ起居進退は只「ありー」の心の儘なりやがて出發の時刻に近づきたれば「ありー」の母も其子の遠く旅立にぞ市門の側に出で來り肩掛取りて打ち振れば「ありー」も被りし帽子を脱ぎ取りて高く振り立て互に名殘を惜みけり

已にして隊を整へ「がざ」を立ちて徐々と行く程にやがて砂漠にかゝりたり砂漠の中とて日は砂の中より出でゝ漸く高く名にし負ふ熱帶地方の沙原なれば吹く風も熱くして頭を焦し只眼に見るものは白き沙と青き空のみなれば心を慰むるものは隊商等の駱駝の上の雜話のみ夜に入れば帳幕を張り四圍にはかゝりをもやして人も駱駝も其中に臥すかくして數日を過ぎ行く程に一の泉地に達したれば此に暫く休みを取り欠乏したる水を袋に充し又もや此を發せしが「ありー」の憂き

旅も初めてのことなれば最と面白く見へにけり

斯くて又數日を行きし頃晝間の程より天色どんとりとして雲は綿の如く重り布き日の光りさへ淡くなり何んとなく天候のあしければ砂漠の最と危險と稱する旋風にてもあらんかと人々安き心もなかりしに日も早地平線に隱るゝ頃果して暴風吹き起り沙石は卷きて雲の如く咫尺の前きも明かならず人も駱駝も空中に卷き揚げられんず勢なれば人も駱駝も地上に伏して漸く危險を免れたりされど沙上の足痕は風のために掃ひ去られ何れの方が西なるか又東なるか方角さへも定かならず左に漂ひ右に漂ひ前に進みて又立戻り四五日此に漂泊せしかども正しき行路を見出す能はず袋の水は漸く乏しけれども泉地の所在も分明ならず其心細きこと想ひやるだに憐れなり

「ありー」は今日まで沙漠旅行の樂しさに引き替へ此憂きめに逢ひぬれ

ば初めて旅行の困難なるを感じ今日は泉地に達するか明日は正路を見出すかと駱駝の背にたよりつゝ早數日をへたれども未だ正路を求め得ず泉地の所在も見へざれど飢渇の餘り僅かに殘りし水を飲み乾して數日の勞れに其夜は終に眠りたりやがて東方明る頃人聲あるに眠りを醒し隊商の話せるを聞くに今日もし泉地を見出だし能はざれば明日は駱駝を殺して胃袋の水により一時の渴を醫せざるべからず然るに他の駱駝は何れも價の高ければ先づ殺すべきものは「ありー」の駱駝こそ然るべけれと評議此に一決せるを「ありー」は聞て打ち驚き我れ遙々と古郷を出でゝ「すゑす」にある父の許に至るに言傳の駱駝を持たで行きたらんには何とて父に言わけせんそれのみならず我父母は素より我の依て口を糊し得るは此駱駝あるがため今此駱駝を失はゞ如何にして明日より父子三人の暮し

立てん如何はせんと一時は氣も狂乱したれども獨り心に思ふやう我此ことを隊商等に歎き悲しむも彼等の評議一決せし上は何とて之を許さんや今更頼むもせん術なしよし我一人にても正路を求め得ざることやあるいよ〳〵今日泉地を見出し能はざれば今宵の中に此隊を脱れ出でなんと獨り心に問ふて心に答へ眠りもせずに夜の明くるを待ち居たり

さて夜明ぬれば隊商等は此を立ち出でゝ又もや正路を求め泉地を探りたれども其日も終には徒に沙漠の中を漂ひしのみにて日も早暮れにけり「ありー」は宵の中より今夜は此を逃れんと心に決し其用意をなし居ることを大膽不敵の若者なり

夜もをい〳〵と更け行く程に隊商等は晝の勞れに前後も知らず寐入りたれば「ありー」は時分はよしと窃と起き出で駱駝に乘りて立ち出で

たり晝は頭を焦す程の熱帶地方の沙原にても夜は却て冷かに吹風も身にしみていとゞ冷氣を覺へたり眼に見るものは只空に輝く星の光りのみ

「ありー」は常より北の方に見はるゝ一つの星と日暮の後に西の方に見るゝ一つの星を記したれば一つの星を後に取り一つの星を右に取り進み〳〵て行く程にやがて東方白み行き旭は沙の原より見れて次第に高く上りたり

「ありー」は駱駝の上に只一人何れを見るも沙ばかり飢渴はます〳〵身に逼り泉地を見出す目的もなく其心細きこと言はんかたなしされど「ありー」は如何にもして父に逢はんとの一心より勇氣を出して飢渴を忍び南々と進みしに遙かの向ふに棕櫚の樹ならんかと思ふもの見へたれば駱駝の足を速ませて其方さして行く程に駱駝もそれに氣付し

か頭を高く上に持ち歩を速ませて進みしに漸く近づくに從ひ棕櫚の樹は明かに眼に入りて思ふに違はぬ泉地なりしかば「ありー」は雀躍して駝背より飛び下り草を分ちて進み行き水やあらんと求むるに呆して清く冷かなる水の溜りのありしかば思ひのまゝに之を飲み波斯棗に飢を慰し生ひ茂りたる木の蔭に葦草布きて休みたる心の中の愉快こそ思ひやるだに快よしかくて何時までもあるにあらざれば先づ水袋に水を充さんと起ち上りて水の

邊りに行きたるに其邊りの葦草の踏倒したる跡あるに氣付しかば此頃旅人の此泉地に休らひたることを知れり由て「ありー」は再び駱駝に跨りて泉地を出でゝ南に行くに忽ち足跡を見出したり「ありー」は大に喜びて入日を右に保ちつゝ足跡に從ひ行きけるに日は早西に入りて星の光りは明なり「ありー」は目的の星を右に保ち尚も前方に進みしに遙かの先きに燒火の光りちら〳〵と見ゆるにぞ又もや駱駝を急がせて火光を目指して進みたり

漸く近き見るに他の隊商の今宵は此に宿らんと帳幕張りて團坐せるものなりし「ありー」は駱駝より下りて徐かに進み彼の隊商等の前に至り慇懃に挨拶しありし次第を物語り仲間に組み入れられんことを乞ひしかば彼等は「ありー」の勇氣に感じ安々之を請合たれば「ありー」の喜び一方ならず

やがて晩餐も終り一同眠りに就かんとする頃又もや南の方より一組の隊商の鈴高らかに響かせて此方に來りて此組に合したり「何故斯くは遲かりしや」など語り合へる樣見れば此隊商と全じ組合なることを知られたり「ありー」耳傾けて聞き居しに如何にも父に能く似たる聲の聞へしかばもしやと「ありー」は心とゞろき直に立ちて燄の光りに透し見るに正しく己れの父なりしかば走り來りて「父よありーは此にあり」と叫び出すに父は事の不意なるに驚き夢かとばかり呆れはて出す言葉もなかりけり「ありー」は尙も語をつぎて母に別れて遙々と「がざ」を出でゝ此に來れるまでの艱難辛苦の次第を述べければ父は涙を流していたく喜び「ありー」よ能くも勇氣に其身を持ち此貴重なる駱駝を助けたり我れ「するゑす」にて汝の來るを待ちたれど余りの日數の立ちたれば事專言の間違しものと思ひ今此隊商と共に一度「がざ」に歸らんと此處

まで來りたれ汝に逢はんとは誠に思ひもそめぬことなりと父子互の喜びは我等の筆もて記し尽すべきにあらず

翌日「ありー」父子は此隊商ともろともに此を立ち出で間もなく「がざ」に歸れりと

●犀

犀は印度亞非利加等に住める獸にして其類種々あり鼻の上には一つの角ある黑き犀と長き角ある白き犀と短き太き角ある白き犀あり亞非利加種の白き犀は身の長十八尺体の周りも十五六尺角の長さは三尺もあらん黑き犀は白きものに比ぶれば形は稍小なれども猛く荒くして力の强きことは遙に白き犀に勝る

凡そ獸の種類も多けれども恐らくは此獸より不合恰なるものはなからん頭は甚だ大にして尾は小く四脚太く短くして指尖には廣き爪を

有す皮膚は滑にして此處や彼處に粗き毛を生ず然れども其皮膚は頗る厚く脇に奇異なる皺襞ありて銃丸も之を貫くこと難し故に亞非利加の土人は此犀の皮を以て楯を造り或は甲を製して用ゆると云ふ

此獸は好みて水邊に住み時々河の中に入りて游泳す其食物とする處は液多き樹木の幹或は枝にあれば堅き角を以て樹木を堀り起し硬き皮膚を以て幹を摩り廻るが故に犀の住める地の林木は皆其外皮を剝ぎ去らる性質猛烈にあらざれども怒るときは頭を垂れて角を奮ひ敵に向ひて進む勢は頗る猛くして虎豹の如きものも逃れ避くるとあり此獸の視力は極めて鈍くして少し距りたる處のものを見ること能はず然れども其耳は甚だ鋭くして少しの響をも能く聞き取ること得る故に敵の近寄ることを速くも聞きつけ直に逃れ走ると云ふ

豹駝

豹駝も亞非利加に住める大なる獸なり脛の長さは殆んと九尺頸の長さは一尺もあらん然るに体の長さは僅かに七尺あるのみ其釣合上より云はゞ隨分不合格なる形と云ふべし頭は小さく一の短き角ありて硬き皮を以て覆はれ其端は宛も流蘇の形をなす毛の色は橙の赤色を帶べるが如くして黑き小點を散じたれば頗る美しゝ

此動物の尾と舌とは最も都合よく形造らる尾は其端に茂りたる毛の流蘇あり之を以て左右に振り立て蚊蠅の類を拂ひ去ること巧なり舌は長さ一尺二三寸もありて端に於て尖り自由に運動すること猶象の鼻と一般なり眼は大にして左右上下に回轉すれば頭を動かさずして後の方にあるものを見ることを得殊に視力は鋭く遠き距りにあるものをも明に見るを得べし

常に廣き野邊に二三頭づゝ相伴ひて徘徊し「しもさ」と名づくる木の軟

なる葉を食とす其食ふときは長き舌もて卷き揚げて口に入るゝこと我々の菜の葉を摘むよりも巧なり

此獸は性來臆病にして其鋭き眼を回轉して猛獸類の襲ひ來るを速くも知り逸速く逃れ走る然れども已に追ひ付かれしときは此卑怯なる性質にも似ず後足を以て蹴り散す力は甚だ強く獅子虎豹の類も之がために倒さるゝことあり

亞非利加の土人は常に陷穴を設け木の枝或は枯草を以て其上を覆ひて之を捕ふ亞米利加の動物園にありては往々之

を養ふこれ此獸は穀物及枯草の如きものにより容易に養はれ氣候の變動あるにも係はらず能く生ひ育ちて繁殖すればなり

昔し支那にては此獸を麒麟と稱へ天下治り世に聖のあるときは此獸も亦出づるとなん傳へたり

版權登錄

明治二十六年六月廿一日印刷
明治廿六年六月廿八日發行

版權所有

著者　森本江南
發行者　大阪市東區備後町四丁目七十八番屋敷　吉岡平助
印刷者　大阪市西區土佐堀裏町四十番屋敷　村瀨時
發賣書肆　大阪市東區備後町心齋橋通角　吉岡書店
發賣書肆　神戸市元町通五丁目廿三番邸　吉岡支店

定價金拾貳錢

特47-609
12005008961 02